

備前藩湯淺先生編輯

常山紀談

浪華 宗榮堂梓

常山紀談卷之十一目次

特32
557

- 一 竹中重治心掛の支タケナカシゲハルココロカケ
- 一 岑澤某謙信と撃んとせし支ミネザハナカシケンシンウツタ
- 一 久世三四郎坂部三十郎物見の支クセセサカバモトミ
- 一 野々口彦助物語の支ノノグチモトカサリ
- 一 石谷定清御供と桑の支イシヤサダキヨマヅ
- 一 坪内玄蕃心得の支ツツノウチノバヤココロエ
- 一 道化清十郎平野與兵衛と對面の支ドウケキヨジウラヒラノ
- 一 谷太郎左衛門物前心得の支タニノチロサエモトマヘ
- 一 可兒才藏の支カニ

一 石田三成イシダミツナリの支

一 関白秀次公セキハクヒデタツノミヤウカイ生害ナマウガイの支

附 吉田修理ヨシダの支

一 水村常陸ミヅムラヒダツノサライゴ公最後の支

一 秀吉アキラカ有岡城アリヲカへ使者シシヤ小行ユカきし支

附 河原林カハラバヤシ越後山脇源大夫ヤマワキの支

一 成田助九郎ナリタ誅チナせりし支

一 秀吉公シウキ連歌レンガの支

一 三木牛之介ミキ之歛形シハガタの詩哥シイカの支

一 谷大膳武勇タニダイゼン討死ユウウナジミの支

一 戸川肥後守秀吉公トガハヒゴノを負オふ支

一 黒田如水クロダジユスイ先見シケンの支

一 秀康ヒデヤス卿伏見フシミよりギゾクニ妓女マヒ國が舞マヒを見ミぬ支

一 直江兼續ナホエカネツグの支

一 石田三成イシダ直江兼續ナホエ密謀ミツボウの支

一 兼續カネツグ惺窩セイクワ先生アヒ逢アヒの支

一 石田トモガラが黨トモガラ 東照宮トモガラと謀ハカリタテマツ奉らんとせし支

一 細川忠興ホウカハタ忠告オキチウコウの事

常山紀談卷之十一

備前國 湯淺新兵衛元禎輯録

○竹中重治曰分は過るタケナカシゲハルイウツシ 價アタヒと以て馬ウマと購アガナふべし其馬ウマ小乗コカリする
 時トキ能ヨき敵トクと見ミつけ追詰オウツメて飛下トビオりんと思オモふら或ナは又マタ鎗ヤリと合アせん
 と下オり立タツ時ウツジ馬ウマ副ソベの人ヒトは續ツヅくごとし此馬コノウマ人の物モノは成ナるべし又マタか
 馬ウマの得エが〜と思オモふ心ココロ出イて期キを延ノボし更マタあり此能コノヨ馬ウマゆゑユヱ却カて
 名ナを失ウシふ更マタもり〜とせ士シの金キン十兩ジュウリョウを馬ウマと購アガんとすスふ
 五兩ゴリョウを求モトむ〜とせげもあく飛下トビオり乗放ノリハナち〜能ヨき時トキの捨スち
 五兩ゴリョウを求モトむ〜とせ又馬ウマと求モトむ〜馬ウマに〜とせ此心ココロ得エ有アル
 身を義キより〜と捨スちを〜して財寶ザイホウを〜塵芥チンカイとす

思ふ心掛常小有へとこそ士の本意ありとぞ
北條家の既と預り諷訪部といふ者度々功名あり何れ此時
の軍や勝田八左門といふ者と二人物見に出る敵不意出
てはめちよふ二騎引取り時諷訪部の馬を預るゆゑ勝をさる
馬に乗らり故乗切て馳歸る勝田の後より敵追詰らんが下
立て相戦ふ味方助来まじ勝田打伏られ頭半切とて敵引
取りり勝田助らんと思ふ勝田手あく頭を持上げ未だ死せ
ぬ人々の奔て歸るやといふを聞て助け歸りたり勝田も
度々の功名あり後松平右衛門大夫ふ仕へたり○竹中が論尤き
る者の知るべき処あり弓箭取身の朝夕は軍旅の支と論せん

支ありたりきとていふは必ず天の冥加の尽べきあり
戦國は生きたる人の其支は臨て功有て禄を得たりとて終
わらふ今泰平の時小生も父祖の蔭をく禄をせむ小するも天
より士の職を命ぜりてとて天より命ぜりて其任を忘
るる人々の天の冥加を盡ん支必定あり又天下の四民の上にあ
る下を鎮る職ありとせん口惜くべき支ふこと
謙信の許ふ岑澤某といふ士罪ありとて放斥せりし越中の推
名小奉公謙信越中へ師を出さる時彼士叢みかくれ鉄炮を
持て伺ひ居たりしが俄に鉄炮を傍に投捨て泣居り謙信見出
しといふ岑澤わづらといふとていふは仁君智將とら

奉らんモウと存ゾシぜーナリ支シ悔クしく成ナリてい今イマ遙ミタ小見奉ミタマウり先マカ小屋形ヤカダの
心ココロ背セき又マタかろふ設セけを工コトモ支シ此上コノウヘもあア大罪ダイサイうウ疾々トウク
首カビと勿ハネらるルとつひツヒてひヒま伏フシるル謙信ケンシン打笑ウチワラひ吾ワに智仁チジンと
相サカ應オウせざる虚名キヨナイあり疾馳トクハセ歸カヘりトク推名シヒナ小コうウく仕シへトいハえシらル
どドもモの士シ越後エチゴ又マタ歸カヘりトク農夫ノウフと成ナリて一生シヨウと終ハハりトクたりトク也

○東照宮トウショウミヤ何ナニのトキ時トキ軍イクサ多クセや久世クセ三四郎サウラウ宣廣ノブヒロ坂部サカベ三十郎ジウジロウ廣勝ヒロカチ
二人フタヒトと物見モノミ出デりトクあハ坂部サカベの勇ユウりトク色イロあり久世クセの氣色ケシキ甚シ悪クふル
一ヒトくハ側カタより笑ワラふ人ヒトの有アりトク東照宮トウショウミヤ坂部サカベの天性テンセイの剛ガウの者モノありトク
久世クセが及オヨぶトクたトクとにニあハりトクばトクうウまマどドも久世クセの人ヒト小コ劣ロウりトク生甲斐イキガヒはハ
と思オモひ定サめルる者モノ其故シヨメ小務コトメとトクげルむトク心ココロを勞ラウして其ソノけケ

きキ顯アキまマて見ミゆ今見イマミよ久世クセの坂部サカベよりトク敵テキ近チカく進スむ行ユキて見ミる
歸カヘらむ物モノと仰オホる処トコロ又マタ二人フタヒト歸カヘりトク参マりトク果ハしトク御詞ゴトのトク
ありトク東照宮トウショウミヤ坂部サカベの生得シヤウトクの勇ユウと頼タノりトクて懈オヤスリりトク久世クセを
勵ゲむトクをりトク味アジい深フカと感カンぞトクせトクあハりトク

○明智光秀アチチキミウヒデが士野シノ々シノ口彦助コノヂノ山中ヤマナカ鹿カ之ノ久キウ逢ホウて功名コウメイぞトク支シと問ト
鹿カ之ノ久キウ逢ホウて目メの明アカぬトクりトク能ヨク心ココロ得エらトクまトクしトクりトク彦助ノヂノと
ぞトク支シとトクもトクあハりトク其後イノチ何ナニの戦タケヒや川カハ際キハ小野ノ々シノ口コ打ウ出デるトク
處トコロ小朝霧コアサギリうウまマびビと物色モノイロ見ミえトク分ワカむ時トキ小山中コヤマナカが教ヨシへトク支シを思オモ
ひ出デり手綱テヅナをひヒく爰ココより目メが見ミえぬトクとつひツヒの吾ワ後ノチまマりトクあ
らんと目メとつひツヒと心ココロと静シヅめル目メと開ヒラキるトク小川コカハの半ナハは物具モノグありトク

武者大差物と指て只一騎渡り来ると見付て心もろくやふ目
も明ふ不成らんば押並べて引組であら首と取り後彦助六
まも我眞實の功名はあつて彼敵大が物ふ身の疲まき
報く我小組敷まらあん彼敵も物前ふ目が見えざりけんと
語りき

○石谷十藏定清の先祖は遠江石谷村の人あり大坂御出陣の時
江戸は残りやあひし御跡より従者一人は具足箱と背に負せ
自ら鎧と荷ひく潜る江戸と出駿府まき追付奉りまらふ
て心易く御近習の人ふたより江戸は残り中支口惜く存じ
重き御法を破りまき泰りぬ首と削らまん支の素より覚悟し

も支あまびいふ御咎蒙らんと露をりも悔む支いん
と中上であつりくとりくく將軍の殊な法制を嚴と思召
あふあまび争う御ゆるさまの有ごさり御宥あらん御あ
より引づきまき追々来まらん必だ裂しと刑も行まらん
ゆまきも捨置べき支あふ縁がかと申はる 台徳院殿黙して
かりせん十藏の既ふら支聞えはる上の今夜の明朝の首を削り
まあんと相待居るし十藏よとてまき思ひ極て進出ま
如何して法を破りまきやあき奴るか切て素をやと思はる若き
者あまびゆるんとして仰出まきて黄金二枚賜りまら板江戸へ
重傷く誰人あまあ一人も忍びく御供に奉りまら重罪ふら

と固く仰出されきるとある

○石谷十藏定清坪内玄蕃サダキヨウツボウチザンに向て度々の功名世ふ高しありと心掛

みく功名を遂げ道もあらば教へられし坪内聞てよくこそ

問まてん人々事と臨て神の力を頼と八幡とていふ我も又頼てい

相づのふなりと成就せとありのふより我の毎も八幡といふ神

と刺通さんと一筋ふ思ひ事後とを取ざりしといひるるとぞ

○道化清十郎ミチカケの美濃の人みて信長は仕て度々武功勝まると故

に信長清十郎が指物無双道化といひ四字と書て與へらと

ふ世の人無双道化といふと平野與兵衛の齋藤家の士あるが

是も武功譽ま高く信長是を拾とて一時人々往て平野と對

面する道化も打連て物語りが道化いとく御身いから先

立引小殿と聞其趣と委て語て教へらとといふ平野と

らふ心懸故といふと齋藤家と冥加ふ叶ふ士の皆々討死し

吾生残つとて重ての軍らふ必死と思ひはまとも武勇の不足も

多し死と道と今日の間ふあひ耻の上耻にあひいと答へらと

只今の答至極の道理とて先づけ後殿の必死を志ざりてあ

成がとと大に答て感どりたり

○谷太郎右門の武功の士とく黒田家小客の會釈とて招き置と

り谷が日軍の場みて先敵より味方に氣と付べ一人先小進

出踏とてゆる処と跡より二人三人行重ら始出る者と強と知る

ぞ一其野一行へくば吾ハ又別の所ハ独踏出してあへ居るを
 く志せよとぞぐくもれん又其所へ味方はくぞし又日頃心書き
 人のまが主君ハ寵愛せりとも軍場うて其人のうらりふ寄べ
 うらば必獨立の心得まを又士ハ弓鉄炮の上手といふる支好む
 更にあつて敵と打立りた時り或ハ城へ射込りた更の何ん足
 輕ハ進めがら故入をゆりて命のあらん時射あてまはる面目
 あり危き場ハ敵も堅く守る故に多くハ天死する更ありとい
 へし

○可兒才藏吉長ハ尾州可兒山の人とて大剛の者あり篠と指物
 小も首と取て篠の葉と口中ハ押込投棄て後の證とくするゆゑ

世の人篠の才藏といハ傳ふ関白秀次ハ仕へ長久手の軍ハ秀次
 引退ましつ岡本嘉奴村善右衛門ハ踏止まり支へし才藏が
 來るを見て山ハ倚り心地せしとて才藏殿ハ何方あぞ
 と問て其退まてくる方ハ行り目前の敵と見捨て引退ハ聞
 しゆを似ぬ才藏かと論とるが或日聚樂み語り出し才
 藏ハいふも所存ありやと問才藏さうて何心なく殿の跡と
 慕いふるづりくき今人々の論を聞ふ尤ありけりハ暇申はとて
 宿へも歸らば直立去り後ハ福嶋正則招て七百五十石の
 禄と與へらる才藏が下人ハ久右衛門といハ剛の者あり才藏の
 禄の半分とあへ竹内久右衛門といハ才藏が墓藝州廣嶋あり

在といつて

○石田治部少輔三成は近江國石田村の百姓佐五右衛門といふ者の
子のといふけありし時佐吉といひしが家貧しく近き辺りの寺
まやりて在り或時秀吉彼寺小行と佐吉が明敏なる故呼出
て側小仕一が頻小禄を増し水口四万石與へらるる後三成小
人數多招きたると問まし小嶋左近一人呼出るとやに秀吉
それの世小聞ゆる者し汝が許し小禄をいふを奉公まぶさとい
とましるる三成禄の半分を分ち二万石與へいと答ふ秀吉聞て
君臣の禄相同といひむより聞も傳へむいふまも其志あり
ていよをも汝の仕へ下のいふ人も計ひらるるかと深く感ぜられ

嶋と呼出して手づから羽織と與へて是より三成小能く心と合
せしといふまゝより三成佐和山を賜りし時嶋小禄増與ふと
よりのいふれども禄更小不足りもいふに他の入るる賜りしと辭
しつら左近が父もや室町將軍家仕へ江州高宮の傍ふり
あつたぬまゝ隠居しと三成招き出さるる
○秀吉秀次と養ひ関白と譲り夫より太閤とやに文禄二年秀頼
誕生あり秀次よりぬまももあつた有るまゝ文禄四年七月
八日三成太閤の前小出て関白の謀叛既小ありしと證を正
しける書を見せし中よび太閤怒て宮部善祥坊堀尾吉晴亦小
下知して疾伏見來らるる一先高野に退きしとあふ

二ツの中ウチと云送イヒオクらまカシマ秀次ウケタマ畏り承りイヒて其後粟野木
工頭秀用ヒデモチシラエ白江備後守成定熊谷大膳亮直澄三人ナリサダクマガヤ此支イ栗へ
有ナべきと問トふ白江聞キもあカ殿下デンカ只今聚樂タカシユラクを出イる
莫然シカるシべシ此三人の中一人伏見フシミ一オカ泰オカ多オカく犯ツミる罪ツミを中
開ヒラくべウツテりフセキヤイ討手來ツキテらホカ防矢射ササギて思召定ホカめホカらホカまホカ入ホカ外ホカ他
あホらんやと中ナカに熊谷此謀カグイモトモ尤ムさムる支ムあムまムども帝都テイトの騷サワギと
あオらん支オ其恐オソレあオふあオらオむオまオ謀叛人ムホンニといクんクも口惜クチラシ
らフどフじ父子の礼義レイギあミヤコまミヤコ都ミヤコを出ヒカシて東坂本ヒカシサカモト趣オモムきガシ讒者シヤを
糾クるクん支クをカラササキバママ御許ミヤコさんカラあカラくカラ唐崎濱カラサキハマ小打出コチデて勝シヨウ
負マと決ケツまホカるホカの外道ホカミチなりアハとアハ中アハらアハる粟野アハ只今危アヤフらアヤフ小逼セマりて
ろセろセろセ

宥ユと請コトとも聞入キらキまキ下ト迎ムカも遁ニゲまぬ所トコロあフまフ今夜伏見フシミと押オシ
寄ヨて屍カハネと城シロふシロらシロまシロ婦人フジメの縊シブまシブる死シらシが如カくあカらんを口
惜オと支オなオらオと中ナカらナカんナカども秀次モトヒも用モチヒぎモチヒて高野山カウヤサンと趣オモムき
ろセろセろセ

一説ヒトコト小吉田修理コシダシユリ此時コトキ中ナカらナカる謀叛ムホンシシツ真マコト實マコトふかマコトとマコト人ヒト
數ス一萬我マン又マタ付ツキらツキまツキらツキ今夜伏見フシミに夜討ヨウチしヨウチて只一時タビトキ不フ城シロを
乘破ノリヤるノリヤとつツひツくツれツども聞入キげキりキしキとキ修理後シユリノチ越前秀康エチゼンヒテヤス
卿ツカ小仕コツカ大坂陣オオサカジン忠直タチナホの供トモして先陣サキジンより五月五日天王寺口
の御先手サキテカ加賀利常カガトシツネに命メイぜメイらメイまメイらメイ忠直タチナホ甚シ怒イカらイカまイカしイカ時
承多伊豆守オウダ然シカらシカ明日真先アッサキけアッサキく加賀の軍兵グンビヤウを踏フミらフミえ

ねり小伝ある軍せんうふ支の吉田修理よく決断する者
ありといとて呼出せ修理聞もあへに夜も短く早支度して
打立べし人々續りまよと言捨て己が陣所小歸ると否やひと
く物具一先がけして加賀の軍兵の押行所又修理馬と
乗寄せ今度の命うの岡山表の加賀天王寺表の越前の三河
守先陣と承りくろ各いあうざうやと言もあへに真一文字
小押破りけ抜くまは越前の軍兵おづく修理い今日必死
と思ひ定めんが本多忠朝陣より鉄炮を打かるとい
く死やくと聲々小呼り真田が陣と切崩し北の敵を
追かけ天満川の深き馬を乗入と溺死しつるとぞ

青巖寺ありく自害ありの三人も所々ありく自害せり是三成太
閤の没後世とくろくまはまは先関白と失ひつると後ぞ
人々

○関白秀次高野の青巖寺ありく自害ありつと事と司り寵愛
せし人々所々ありて誅せし自害しつる中木村常陸介師
春檢使の松田勝右門小向ひ今度関白聚樂と出て伏見小趣を
多くと定めし時師春中めつる太閤御對面ごふおろは
えんら詭者のかど明らめめんうまごも夫中ぞもあく中途よ
遠國へ放流せしものふ甲斐あく御身と白双又伏ありん必
二ツの間ありべしありと太閤の使者を斬て捨諸將の妻子聚

樂ふあるを人質と取罪あるを更と申開くせめづるをあり
んとの和睦も堅く定まり又戦いも勇名を遺さず空しく聚
樂と出させめ小様や有つと再三諫め申さども吾太閤小
敵する心ありとて兼引いざり然らば関白ふ於て異心あり
ゆゑる更明く此旨と達してありお其恩黄泉の下りも
忘るべしと云置たりと松田折と得て秀吉小中々んが太閤
木村が志を懸て妻子に米百石と与へて京都誓願寺の近所
小住居せしむ

○秀吉信長の使者として荒木村重が有岡の城ふ来る村重が士
河原林越後守治冬猿めがつた中より遂ふあづとあまづ一今

刺殺さん更易くんと村重にさくやと申さども村重聞入む此
更と秀吉小語りたるより秀吉治冬を呼出して懇々詞をわけ
ゆゑる脇指と抜て引出物ふぞりたる村重指替のあて
とついで秀吉吾刀一ツと頼めて信長ふ奉公さふ者ふ非むとい
たまはるり後秀吉世を平けて治冬を深く悪くはがり出して
殺さんたるより治冬君の為小其仇を除くは武士の常れ更あり
秀吉舊怨と忘まはば無道ことついで死しりたる
秀吉河原林小與へらまゝ脇指の三條吉廣が作し河原林が
舊友山脇源大夫重信小傳へり山脇の攝州の人知りしより
勇名の聞えあり甲州へ往て内藤修理が許ふあり其後攝州

小婦カり荒木攝津守村重ツガ仕へ頻シ用モチいらして長臣チカウシをり
村重カシダ神田伊賀守と軍の時神田が軍奉行郡兵大夫勝カと
剛ウチトツの者あつて毛付ケビカズして討取トツり九首モト數九十八取カクて首供養シヤウ
三度キヨヒデせしとて荒木ホロヒ亡て重信モト中川清秀カクの許井小隠モトを居カクり
清秀ツマの妻マの重信マがとどく前田利家柴田勝家丹羽長秀一
万石ヒキコモとりて招ゴコシきしりとも引籠ゴコシり居ゴコシりしを護國公池田信
懇ネギに招ネギきせめひくく來仕ヤマガキへ山崎合戦アサカ明智アサカが士大将丹波國
あつち山アサカといひくる城アサカを預アサカり居アサカり村上源之丞バシヤウと馬上
りて鎗ヤリと合ヤリと山脇ヤリが鎗ヤリの十文字キズツキして村上が馬の額キズツキに疵キズツキ付
馬飛出オチるるる源之丞馬オチより落オチるるるを従者オチけ來り助オチるる

源大夫詞コトバとかけ村上と引組ミカタる所ミカタと味方ミカタ數多アヲタあち合ミカタて村
上ミカタが首ミカタと得ミカタり其後ミカタも功名ミカタ有ミカタて士三十騎ミカタの將ミカタり

○秀吉ホウコウ北國オモムの趣ニ時丹羽長重コマツの小松タチヨリの城タチヨリに寄タチヨリりる長重
の士ナラタ成田助九郎ホタタダウといふ者ホタタダウあり秀吉ホタタダウ先殿ホタタダウと北陸道クワシレイの管領クワシレイとせん
志津シヅが嶽ダケめく約束ヤクウツクありてはるが加賀二郡カガニノノ越前若狹セツエと賜タマハぬ
先殿セント過スギさせぬ後セシ小松十二万石デン小減スデト既メシ小滅メシ亡メシ小近チカりとも
中ナカが秀吉フギの不義フギ憎フギむる餘シシりあり臣シシに討手ウツテ仰付ウツテられよ報ウツテ
く刺殺サシコロせむといひなんども長重チカウシ聞入チカウシりてとて止ヤまらるるを
秀吉イカツいりあつて洩聞モレキカきん大小怒イカツて成田ナラタを憎イカツむ甚チカしり
多ナラタまの成田ナラタ小松ナラタと退アサクマて伊勢アサクマの朝熊カク小隠カクを居カクりしと終チカり搜チカり

出^コして殺^コさるる成^ナ田^タが子^コ半^ハ左^サ門^{モン}長^{チヤウ}重^{ジュウ}は仕^シて小^コ松^{ソウ}の軍^{イクサ}を戦^セ功^{コウ}あり

○秀吉^{フキジウハ}或^{アルトキ}時^{トキ}紹^{シウ}巴^ハふ向^{カウ}ひ吾^{ワレ}發^{ホツ}句^ク多^タん汝^{チン}脇^{ヂウ}句^クせよと

秀^{オウ}少^{ヤマ}りりみぢりうとけなく星^{ホタル}とせよと一^{ヒト}ふ

あつとせよとぬ火^{トモミビ}のうげ 脇^{ワキ}紹^{シウ}巴^ハの句^クあり

紹^{ホタル}巴^{ナクムシ}の鳴^ネ虫^{ムシ}にりりどとや秀吉^{フキジウ}聞^キて虫^{ムシ}の聲^{コエ}あつても吾^{ワレ}あ

せんとき鳴^ネぎてや有^アべとといえれし時^{トキ}細^{サイ}川^{カハ}幽^ウ齋^{サイ}より

武^ム義^ギや志^シのつよはてする由^ユは星^{ホタル}より外^{ホカ}なくはもな

とせよとる哥^{ウタ}のいりてとせよとれい秀吉^{フキジウ}悦^{ユエ}むとせよと

此^{コノ}歌^{ウタ}の聲^{コエ}ありといふ心^{ココロ}あはれ雨^{アメ}降^フる夜^ヨは皆^{ミナ}虫^{ムシ}の鳴^ネ止^ト

あまの光^{ヒカリ}の見^ミゆる虫^{ムシ}より外^{ホカ}虫^{ムシ}ありといふ意^イあり

○三^ミ木^キ牛^{ウシ}之^ノ介^ケい畠^{ハタ}山^{ヤマ}高^{タカ}政^{マサ}小^コ仕^シて剛^{カウ}の者^{モノ}く五^イ尺^{シヤク}なるの鋏^{クハ}形^{ガタ}打^ウる

曹^{カネ}と着^キて運^{ウン}在天^{テン}見^ミ敵^{テキ}無^ム退^{タイ}すといふはしりぬるそよりのま

軍^{イクサ}小^コづつとせよとせよとせよとる歌^{ウタ}と鋏^{クハ}形^{ガタ}ふ書^{カキ}りしが天文^{ウエン}

十^{ジュウ}一年^{ニヤウ}正^{セイ}月^{ゲツ}河^{カハ}内^{ノウ}の合^{カウ}戦^{セン}ふ一^{ヒト}番^{バン}鎗^{ヤリ}を合^{カウ}せ敵^{テキ}の大^{ダイ}将^{シャウ}を討^{ウチ}取^{トル}り天

文^{モン}十^{ジュウ}六^{ロク}年^{ニヤウ}七^{シチ}月^{ゲツ}廿^{ニヤウ}三^{サン}日^{ニチ}三^{サン}好^{コウ}政^{テイ}勝^{ショウ}入^{ニヤウ}道^{ドウ}宗^{シュウ}三^{サン}と舍^{シヤ}利^リ寺^ジの軍^{イクサ}小^コ討^{ウチ}死^シ

る後^{ノチ}此^{コノ}哥^{ウタ}のこゝと秀吉^{フキジウ}の物^{モノ}語^{ゴト}なる入^{ニヤウ}有^アるれい秀吉^{フキジウ}歌^{ウタ}の趣^{ソウ}意^イ

よろり〜び吾^{ワレ}あはれ人のきこゆ〜出^デるをよろり〜れ軍^{イクサ}の

時^{トキ}も先^{サキ}がけと〜とよしびき物^{モノ}をといふとせよと

○天^{テン}正^{セイ}六^{ロク}年^{ニヤウ}秀^{フキ}吉^{ジウ}播^{ハク}州^{シュウ}三^{サン}木^キの別^{ベツ}所^{ショ}長^{チヤウ}治^ヂを撃^{ウチ}つ時^{トキ}谷^ヤ大^{ダイ}膳^{テン}の濱^{ハマ}手^テ

の大將より兼て大膳の寄騎と秀吉望まざりしも信長ゆ
ゝまじりて加勢とじりらふ大膳敵三騎と馬上にて鎧を合せ
皆討取り秀吉疾うこの丸の名を攻らまよとりの大膳城堅
固めと容易に攻取むと答ふ秀吉日頃勇名高き大膳小城
一ツ破りしゆらやと詞をけらるれば大膳も怒り秀吉も既り
刀の柄に手を懸べと色をりしる竹中半兵衛立ちあがり戰場の
勝負こそ力を尽まぶきふいりあるをどしり処に蜂須賀彦右門
も来りしと秀吉が戀と取て押返に夜ふ入て秀吉酒肴を持て
大膳が陣屋に至りしるの武功拔群なり先の問答の我過りて後
悔大方なりとて懇情甚し其後大膳手勢を率てこの丸を攻

くろ城中もくろくを大吏と防ぎ矢石と打出せども大膳少もひる
ず兵士五十騎歩卒二百づり一の城戸口を押破りしる手負死
數とあはれに寄手押つけば大膳念なく乗破りしるが數ヶ所手
負て踞居る所法師武者狸々皮の羽織着るが引返りて
大膳向ふ大膳吾疲まより近寄て首を取て高名ふせり云と
きく走かると一太刀打つ大膳敵の草摺と取て引よせ脇指と抽
て刺貫く処に別所が士大將由井小兵衛と名乗て引返りて馳来
り大膳を一太刀斬りかゝる処に大膳が嫡子出羽守十七歳あるが
走寄てたむうけて由井を打て芝居小打居押へて首を取父に向
へば大膳の息絶り出羽の父の死骸を陣屋小入を取る首を秀

吉の實檢シツケン小備コヅナふ秀吉大膳が討死ウチシせし由ユを聞キてせめく死骸シガイ小
なりとも對面タイメンせんとして陣屋チンヤへ行イき惜ウレシむ人ヒトを討ウチせざるよとて涙ナミダ
ふむせざるまじり

秀吉家譜カフノセ小載ノセくらく大コト小異コトあり然シカまども此コノ一条イツノ谷タニの家ウチ小
傳ツタへる説ワカある由ユあり家譜カフノセ誤アヤマリるべし大膳コウ江州イヌガミ犬上郡イヌガミの
人信長ツカ小仕カハジリへて川尻肥後守イナバ稲葉伊豫守イナバと同ドウく軍の評定の
人ヒト小加スガへら多オホ十四シヨウ才サウより四十七シヨウ才サウまでマデ鎗ヤリと合アヒするス支サ九ク度ト首ウチと
取ト支サ十七シヨウ度トあり

○浮田秀家ウキタフシメ伏見フシメあり秀吉を饗キヤウする時廊下ラウカより行く処シラの白
砂スの上ノ戸川花房トカハハナフサを始ハジメとして並ナラび居イて拜謁ハイエツを秀吉戸川達安トカハタカヤス

小吾コゴとあといふまじく戸川秀吉とくはあつて書院シヨウインふゆは
多オホく秀吉からあるまじく多オホくありて其ソノよりして古フルく家々の礼
儀キも多オホく失ウシひナるマ也

○秀吉病重ヤマトオモより一ヒトくバ朝鮮渡海の軍兵と引取んと計らるる
時朝鮮へ必カナラ徳川殿赴カハドノオモムくせめづいづ日本オノツカへ自ら徳川殿キは歸キ
服フクせしと人々オモモホカの処オモモホカ小思オモヒの外オモヒノホカ秀吉石田三成小命ミツナリぎくまじく
朝鮮テウセン小赴オモムきよりさして日本の權威ケンイハ三成小歸オモムまじるといふべし
黒田如水クロダニノスイヒトリ独オモム是オモムと然シカりオモムとぞば朝鮮の支サ三成是オモムと承オモムるオモムふよとて
日本ニッポンの徳川殿の掌オモム中オモムありと覺オモム也オモム三成是オモムより伐オモムアオモムく人オモム是オモムと
嫉オモムこふん然シカらバ徳川殿の仁徳ニトクは靡オモムさオモム従オモムひオモムく日本ニッポンの自然シゼンと徳

川殿より帰服せんといふまじく果しと然りと

○越前の秀康卿伏見より國とて小妓女と名て舞きし時襟ヒテヤスの珠フシミ數見苦スミしたて物具の上よりけり珊瑚サシゴの珠ス數と賜タマりたるがまじく舞マシたる時頻ヒキリ涙と流ナガしめ人々怪アヤしと
まじく秀康卿今天下小幾千万の女あまとも天下第一の女と世小
譽ホツられ名高ナツカき此女なり吾天下第一の男と世小いさむばあ
女オト小く劣り果ハテすると思ナカへば泣ナカまると仰オホ有ナり

○越後の士大将直江山城守兼續カネツグの朝日將軍義仲の乳子樋口次
郎兼光カネミツが末孫マソノなり謙信ケンシン小仕ケシへて景勝カゲカツ小至イタる景勝奥州アウより百万
石と賜タマりし時米澤ヨネザハ三十万石と直江小與アタへらと倍臣バイシンの中第一の大

祿コト長高サラく容儀コト骨柄サライ双フタなり辨舌ハニゼツ明らかく殊コト更大サラ大膽タイマンある人多コトり
且カツ文藝ブンゲイも暗クラく五臣ゴシン注チウの文選モンゼン此人ハニカウ板行イタせしむると詩シと
も作ツクりし

春雁ハルガニ似吾ニミ吾ニミ似雁ニミ洛陽城裏ラクヤウシヨウ北門キツ花ハナ歸カエをどつ句クも世ヨ小コま
たり伏見フシミの城シロより諸大名シヨウダイメイ幾シ茅チも並居ナリる中ナカ伊達イダツ政宗セイムネ懐中クワイチュウ
より金銭キンゼン取出キスツして人々ヒト小見コミせしむる其項キンゼン金銭キンゼンの始ハジまり頃キョウ
より珍メダカしとてやうな直江ナホエが末座マソ小有アリしとこれ見ミらると
有ナホエ一時直江扇ナホエの上ウラより金銭キンゼンと置オキて打返ウチカエし女童メウロウのそと孫ソノつくり
みまナホエ観ミるが政宗セイムネの苦クルシうもいさむ手に取トルりし言コトも終オハら
り直江謙信ナホエケンシンの時トキより先陣ゼンジンの下知ゲダして麾取ガイトリの手テ小く賤イヤシき

物とて汚れぬ扇アキモノ載てんとて政宗のうへに投戻ナゲモトしり
兼續父も山城守とて元僧モトソウありしが還俗ゲンゾクして武勇ブユウを更と
しり

○石田三成イシダミツナリ或雨夜アツクの夜ヨにナホエ直江チカヅケと近付私語シゴトをヒセ卑賤ヒセニより出て天下テノカを治シらるヲ大丈夫オトコの志シあり我豊臣家オノトヨトミケの恩深オンシく太閤オホトケ斯世カクふかきオモ中ナカの思オモひ立タべりタ終ハるハ旗ハタを揚アゲ天下テノカとてとくやと存ゾシるニ其時ソノトキ徳川家トクヰノカ父子フシノミとて如何イカニして討ウチ亡コトせむ武畧ブリヤクを廻マらシりカらシんやと語カタりシ直江チカヰ此コノトキと幸サイハヒくカ思オモひカん是コノトキを志シまシ呼ヨぶニしテも徳川トクヰノカ父子フシノミ関セキ八州ハチウを領レりカ且カ浦生ウラナヒ氏郷ウヂノサトとて勇將ユウシャウの親オヤとありタ輒タダく勝カツべクば先マ氏郷ウヂノサトと

減ヘり景勝ケイカウの會津エビヅを賜タマひあハんや然シカらバ吾景勝ワレケイカウの謀ハカを旗ハタを揚アゲ我先陣ワレノサキして師シを出デさシ其時ソノトキ西國サイコクの諸將シヨウシヨウとてかシりシ押寄オシヨセて関東クワントウを討ウチつキとシきトとてあハりシと相謀アヒカり終ハるニ氏郷ウヂノサトを毒害ドクガイし後ヒ秀行ヒデユキ八十万石ヒヤクマンマンカヒの地チを削カりシ會津エビヅを景勝ケイカウ秀吉ヒデユキ賜タマひシらシ此謀コノマカより更オコ起トりシとシらシマ

○直江兼續ナホエカネツグ惺窩セイワ藤フジ斂夫ケンブの對面タイメンとてキ聞入キコらシとシ兼續カネツグはア行イくハ行イくハ不ル在スと度タビ々ビク招マけテも行イきタるニ今日ケノヒ来キりタるハも逢アひタるハ偽イツワりタ他ヒにイ出デるハとシ思オモひタ直江チカヰが許モトし行イきタるハ直江チカヰ其ソノ日ヒ関東クワントウに赴オモムきタ跡アトをオフオホツ追オッテ大津オホツにイッリ對面タイメンあり直江チカヰ廢スすタるハ家イハキフキ取シ立シるハ時人臣ジニシの心得ココロエのいふハとシ惺窩セイワ事コトを速スミ小カ

せん^カとせば^ヤ却て敗^トる^井基^コなり^ウとを答^コへ^ウる^ウ後^コ直^コ江^コ景^コ勝^コふ^コき^コ
め^セく^セ旗^セと^セ揚^セさ^セ必^セ家^セを^セ滅^セぶ^セべ^セと^セ怪^セ窩^セい^セと^セれ^セが^セ果^セして^セ景^セ
勝^セふ^セ事^セを^セ起^セさ^セせ^セる^セが^セ其^セ功^セあ^セる^セと^セす

○慶長三年八月十八日太閤^セ逝^セ去^セ其^セ比^セ 台^タ德^ト院^ク殿^シ伏^シ見^シふ^シあり^シて
して^シ太^タ閤^カの^ノ病^ヤ重^シり^シく^シバ^シ関^ク東^トふ^シ赴^シり^シせ^シめ^シる^シん^シ支^シ延^シ引^シあ^シり^シが^シ俄^ニ
十九日^ニ伏^シ見^シと^シ發^シして^シ関^ク東^トふ^シ歸^シら^シせ^シめ^シる^シ是^ニ 東^ト照^シ宮^ノ遠^シ大^シの^ノ神^ノ慮^ヲ
あ^シる^シ也^ニ四^シ老^ノ奉^シ行^シ内^シ々^ノ相^シ計^シり^シ德^ト川^ノ殿^ノ伏^シ見^シふ^シ有^シて^シ權^ノ威^ノ日^々々^ノ増^シ長^シ
ま^シづ^シ秀^ノ頼^ノ公^トと^シ早^シく^シ大^ト坂^ニへ^シ移^シり^シ諸^ノ方^ト一^ニ同^シふ^シ黍^ノり^シ集^シり^シて^シ尊^シ敬^シ
す^シる^シも^シ支^シ然^シぶ^シべ^シと^シ 東^ト照^シ宮^ノ小^シ強^シて^シ于^テ同^シ四^ノ年^ノ正^シ月^ノ十^シ日^ニ大^ト坂^ニ
移^シ居^シあり^シ 東^ト照^シ宮^ノも^シ送^シら^シせ^シめ^シひ^シて^シ大^ト坂^ニへ^シ御^シ出^シあり^シ片^ノ桐^ノ東^ノ市^ノ正^シ且^シ

元^ノが^ノ宅^ノ小^シ御^シ止^シ宿^シあり^シる^シが^シ十二^ノ日^ノの^ノあ^シけ^シの^ノ俄^ニ打^シ立^シめ^シる^シ
淀^ト川^ノと^シ御^シ船^ノう^シく^シ上^シら^シせ^シめ^シる^シ處^ノ小^シ枝^ノ方^ノ近^シく^シ川^ノ岸^ニふ^シ入^シ多^シく^シ群^シり^シ
る^シ若^シや^シ謀^シ奉^シる^シ叛^シ反^シの^ノ輩^トに^シ有^シべ^シと^シと^シ驚^シく^シ処^ニ井^ノ伊^ノ直^ノ政^ノが^シ
足^ノ輕^シと^シ見^シゆる^シと^シ中^ノ者^トあり^シ程^ノあ^シく^シ御^シ船^ノ近^シく^シ成^シる^シに^シ脇^ノ五^ノ右^ノ門^ノ
お^シど^シり^シふ^シ物^ノ頭^ノ跪^シき^シて^シ待^シ奉^シり^シて^シ頓^シて^シ伏^シ見^シふ^シ入^シら^シせ^シめ^シる^シぬ

又^シ此^ノ時^ニ御^シ乘^シ物^ノの^ノ村^ノ越^シ與^シ三^ノ右^ノ門^ノと^シ乘^シせ^シめ^シる^シ 東^ト照^シ宮^ノの^ノ倍^シ
者^ノの^ノ騎^ノ馬^ノの^ノ中^ノ小^シ御^シま^シづ^シと^シ有^シり^シと^シも^シい^シふ^シ又^シ井^ノ伊^ノ直^ノ政^ノの^ノ馬^ノ
上^シり^シく^シ御^シ迎^シに出^シ物^ノ具^シして^シ其^ノ上^ニ常^ノの^ノ衣^ノ服^ノ着^シり^シ直^ノ政^ノが^シ手^ノの^ノ
者^ノ皆^シ下^シ小^シ具^ノ足^ノと^シ着^シり^シ鉄^ノ炮^ノの^ノ者^ト彼^レ是^ニ二^ノ千^ノ計^ノと^シく^シ黍^ノり^シ殊^ノふ^シ
御^シ愛^シあり^シる^シ弥^ノ八^ノ鹿^ノ毛^ノと^シ引^シ来^シり^シる^シに^シ其^ノ終^ニ打^シ乗^シら^シせ^シめ^シる^シ

歸らせめふもつと

此頃既スデふ世間セカイさぶくイヒ小言コトワザありしつゝあるまじり出来らんと人々危

がまありし東照宮も御屋敷ヤシキ大竹オホタケより菱垣ヒシガキと結ムスせらる御

門カドと押開オシヒラき敵寄テキヨセ来らる堅固ケンゴに防マカぎ守らせめふと設マツけあ

御門ミカドとひくく夏然ナツシカぶくふくと申マウ者モノありし門カドを閉トヂて守ら

ば敵テキも侮アホトらるなり只押オシとれて軍の支度シタタをせよと仰オウ有アること

京極キョウキョク高次タカツグ泰タカとく大津オホツツの城シロ引移ヒキウツらせりまんやと進スめ申マシされ

多オホくを聞キコ召敵寄キコシテ上の臺ダイへ押上げ金札キンサツの宮ミヤに邊ヘみく真丸マニマルの

成ナて一合戦イツカウゼンをべし吾兵ウチノヘ二千計ニセンケイやあらん敵何萬テキニマンもあま打破ウチヲ

る夏ナツくくふくと仰オウらるる正月十九日安國寺瓊長老生駒雅

樂頭オカウラシキ中村ナカムラ式部シキブ少輔シウボ堀尾ホリノ帶刀オビヤウ四人シラウゴ老五オウゴ奉行ギヤウツカヒの使ツカヒとして 東

照宮テラミヤに参マシりて伊達政宗イダテマサムネ福嶋フクシマ正則マサノリ蜂須賀ハチスガ至鎮シチジン縁組エングミの夏ナツり

よりて徳川家トクヱンケ独擅ドクテンなる夏ナツども豊臣家トヨトミケの爲然タメニぶくふくと申マウ

申マウ者モノありよりて世の中ヨ愈イユさぶくなる風説フウゼツあり其頃サカキタマシ榊原サカキハラ式

部ブ大輔オホボ康政ヤスマサ伏見フシミふ上ウるとて二月廿五日尾州宮ビシヤツキふ着ツキたるが伏見フシミの

騷サワがキき由ユと聞キ日夜道ニチヤミチと急イソぶと道ミチをぐくうてきけは伏見フシミよりて

既スデふ 東照宮トウテウミヤの御館ミヤノへ敵押寄テキオシヨセりたるをくつひあつた廿六日の晚ヨ

膳所ゼンジョより伏見フシミより飛脚ヒキヤク小行逢コキヤウいさぶ弓箭ユミヤの始ハジりぬと云イハ

と聞キ康政ヤスマサ悦ヨシんで則膳所ソレゼンジョ小陣コジン一秀頼ヒデオリの下知シヤウと稱イハふ伏見フシミの騷サワ

小付コツキ東海トウカイ東山トウサン兩道リウダウの人留ヒトドモまるるとめさせて勢田セタ矢橋ヤハシと言イハ

押留り其頃の騷サカきし諸國より聞傳キコトへ京伏見キョウフシに集る人殊アツマ
の外多ホカうりし押留りオシト草津野洲クサツノヤスと始ハジメとして何方ナニカタといふ數
計ケイぶくれば叔康政サテヤスマサ三日の後未刻ヒツジヨクに構カマへる關所セキシヨをひくを
くれば旅人リヨシ一同イツドウは京伏見キョウフシに入る康政コウセイ膳所ゼンを立て七千セチゼンづりの人を
卒スめく伏見フシへ入イりし京キョウより關東クワントウより數万スバシの軍兵グンビシ馳ヒ着キりし
りしめくは康政コウセイ小具足コグツクキ着キて鉢巻ハチマキ馬ウマをウり押立オシテて泰マりし
御前メシ小名コナで御手メテづりし御ミのノと下シりし康政コウセイ下知ゲヂして御藏ミザン
より料足レウタクス數千貫出シせ人々フケワタ分渡ワケワタし内府ウチノの軍兵グンビシ六萬ロクマンづりし
着キりし館タネめく兵糧ヘイリョウの用意ヨウイ俄ニラカに設マウけしりしといふせき店屋テシヤ
物モノを買来キりし數千人ソウゼン京伏見キョウフシ淀ヨドに馳廻ハセメグりし赤飯菓子セキハンクワシとけ

かうの物モノも残ノコらば買来キりし關東クワントウより十方ジュウハの軍兵グンビシ集アツりしと
人々ヒト思オモふ者モノもかカし是コノ依ヨリて石田イシダが謀空ボウクウしくなるといふ
東照宮トウショウミヤ柳生ヤギフ又右門ミナミカドの石田イシダが士大將シテマシ嶋シマ左近サキンと同國ドウクニのよしみ
懇ネシヨありし間谷マニヤを左近方サキンカタへ行ユキて物語モノガタリしく彼カレいふいふ人
聞キて来キると仰有オウりし柳生ヤギフ左近サキン逢アヒて世間セケンの物モノをいひいふ
成ナリぶさ支シありしといひいふ左近サキン聞キて今松永明イマツナガアケチ智チ二人ニヒトの智謀チボウ
決断ケツタンある人ヒトありし何ナニ支シり有アるべしと打笑ウチワラひし此子ココロ細サイい或時ナホウ
石田密謀イシダヒツボウ不及イタズカびし左近サキン豊臣家トヨトミノカミの為タメを存ゾシぜんふ斯カシあつて
止ヤムつゝやムギシも愛コトも存ゾシる昔ムネありし大支オホシを企クシるは我志ウチノシを如
と無ム二無ム三サン決断ケツタンし少し猶豫ユウヨありしは去クりし去年クニより

度々仕課まゝと圖と空しくなぐりぬる多し既小時や失ひぬ能々世のありさまを見らる石田の家を悪む人々大く徳川殿小心を寄る當家の存心計るべく一日の過をも残さず只理を非にやげて唯今やとぐ疎遠の諸大將達へもなぐりぬるて遺恨なく計ひて交り親しむまじく時を待たざるも一ツの計策うとくそとひひきまじく三成さまじく縦令一時小能志と遂るとも後の安らぐべき様を計ることといひなぐる左近のやく事能く一時小勝を得るおくば後何の危き支るべた内府小親も人々と積るふ其兵二万小過べく味方素より心と合する大國の人々又近國の兵と集るとも忽馳寄て五六万とい及ぶ一景勝卿再

拜と取て下知一関東を攻破らん何程の支るべきとて又存る昔といひ出くろく客の来て三成坐を立たれば榎原彦右衛門居残すも左近小向ひいりうも仰せらるること松永彈正明智光秀は無双の悪逆の者あまど支を決断するも誰り相並ぶべき此詮議の破り相手小頼むむとりのをとひひくるとうや其ふりてかく柳生少の答へるごとく

○石田三成を始め相組する人々加賀利家を推尊して東照宮と傾け奉らんと日夜相謀まり利家の長子利長細川越中守忠貞と招きて累年親しむる間薄くくばさぐる危くんと扶めらんやと問ふ二代の知音もくくば聊鹿畧いやと答

らふ利長尤斯うそ有べき頃日石田三成小西等相計つ多
内府の向嶋の館を攻囲んと議決しぬ潛よ知らむと語れ
くば忠貞熟々と聞て日頃の親と斯る大事と告知らせし
浅くぬ交し心得りぬ明日泰りと合はんとて帰らん
是れんより前 東照宮の藤森におりたり井伊直政が
士木侯土佐り 風に乗じて御館の隣る宅より火を
ぬの危き交ありと申す 東照宮御寢所へ土佐を召て
具小聞し名を其翌日向嶋にうつしをぬいなり
直小向嶋へ泰りと 東照宮御對面ありしくば忠貞近習の人と
屏けく只今泰る交別の子細もいふべし石田等黨と結び利家

と依頼して君を亡し中ぶきと企む利長と年頃の親より
て具小洩義つぬ彼等が謀小落がる御設を然るべくしと申
さるるを聞し名過り年信長攝洲出陣の比弱年と武
勇の誓ありし故中通せし斯る深志あるとも知らざり
悔しと悦ぶせむひて榊原康政を名ていふ有べきと仰有
り事急ふ後までいふ制と申すと申す忠貞國の助け
人の與る交取ふくば浅野幸長を召まら彼は徳川家
心と寄すべしと申す頃て使を走らせし取あへむ
泰らと申し忠貞出向ひく交の子細を語らるる人多く中小
かゝる交を知せしと申す交のういありし時疑の生じ易き

習ひふいとて忠貞奉長先誓紙と書て奉りぬ若敵よせ奉
長宇治川と固めりいあん忠貞の敵の中小打交り不意の一軍
仕いべいとぞ相計らるるも是も始終勝を全ふべき
道をもあつた利家と和平あり只二人小任と
せめんとて其翌日忠貞鳳一利長の許小行向ひて昨日の密謀
々内府小告りて語りて利長色と變りてあたるを戯
りや實にやと驚き多く忠貞も愚者も千慮の一得此
変と思慮多し石田謀て両雄を闘いしめ其弊小乗んと料り
ふい両雄相闘ひて亡びあへ安藝の輝元備前の承家あつと大
將りて吾等が如き者の手もなく攻平げあん所存見頭い

寛仁の内府小與してこそ家と起さるる三成と心と合せ
て名と汚し身と失はんの必定ふかく中詞と許容りいふ
はとく内府と今親利と和睦ありて世穩りあらん其を然る
ぶらとく是全く前田家と佑る処うといと詞と尽して規誨せ
らまはるる利長も深く思慮して道理小當まるる其もよく
いけり父小中さのやとて利家小斯と告て利害を詳小語られ
るる利家も諾とるるなり

又一説小五老五奉行の内争論不和の夏あつた生駒雅樂頭
親正中村式部少輔一氏堀尾帯刀吉晴三人和平と取計ふ
だ一と兼て太閤の遺言小因て井伊直政小就て和平の夏

常山紀談卷之十一終

常山紀談卷之十一終



考山記談

• 十二

特32

557

館書圖京東

一
冊

三七
號

七
架

函

雜
史
類

和
書
門

常山紀談卷之十二目次

- 一 東照宮細川家の難を救ひぬる事ホウカケケ ナレ
- 一 七人の大将石田と討んとせし事ウタ
- 一 東照宮上杉御征伐の時近江國水口と立をぬる事ウハスギゴセトツ アフミナ ミナチタ
- 一 東照宮花房助兵衛小起請文と書と仰らる事ハチフヂ キシヤウモン カケ
- 一 下野國小山より上杉入庵義論の事シモツケ フヤマ ウハスギリアンギロン
- 一 渡邊惣左衛門野中市左衛門忍て大坂小使する事ワタナベ ノチカ シノビ
- 一 上杉景勝會津表手配の事カゲカツアヒツ オモテテスリ
- 一 東照宮小山の途中より竹を伐りぬる事フヤマ トチウ キラ
- 一 伊達政宗膽氣相馬の城下小宿する事ダテマサネケンキサウマ シヨウカ シユク

- 一 竹村半兵衛田中長胤と押し止る支タケムラ ナカノチカノ
- 一 岐阜城攻の支ギフシヨウゼ
- 一 森寺四郎兵衛飯沼小勘平と討つ支モリデラ イヒヌマ
- 一 南部越後母衣串とぬぐり支ナシブ ホログシ
- 一 兼松又四郎一柳の陣見切の支カネマツ ヒョウヤナギガレミキリ
- 附 兼松武功言上の支カネマツブコウゴンジヤウ
- 一 山田多門兵衛幼年功名の支ヤマダタモヒヨウネン

常山紀談卷之十二

備前國 湯淺新兵衛元禎輯録

○関白秀次生害の後細川忠興の家小罪蒙る支起まる其子クワンガクヒデタカヲウガイ ホリカクオキ ツミカウフ オコ

細い秀次當時の大名財用乏しと云ふサイイ ヨウジトモ潜ヒソカ小金銀を貸カシあふことあり是人の心をとらんが為且財を利せんが為なりタメカウサイ忠奥も黄金二百枚と云ふワウゴン彼家金銀出納の支と司ツサとれる人急イソクぎ彼金返カヘし券契テガタを破り捨ステ左サかうんウの太閤の奉行キヤウ券契テガタと出デとせセ忠奥チウオいイも叶ウふフにニ此支コノシ

太閤小池聞モレキコえエがガ罪科ザイコウの處シヨせセと人支疑ウタガひヒかカいイをウとト案アント煩ワザひヒ長臣相集チヤウシつツと議ギしシとトふフ松井佐渡守申マツヰ サヅノミツノシとト其年シノトシ

常山紀談卷之十二目次

- 一 東照宮細川家の難を救ひぬる事ホカカケ ナレ
- 一 七人の大将石田と討んとせし事タシキウイダ
- 一 東照宮上杉御征伐の時近江國水口と立をぬる事ウスキゴセトツ アラミシ ミチナキタ
- 一 東照宮花房助兵衛小起請文と書と仰らる事ハナフヂ キシヤウモン カケ
- 一 下野國小山より上杉入庵義論の事シモツケ フヤマ ウヘキリアンギロシ
- 一 渡邊惣九兩野中市左門忍て大坂へ使さる事ワタナベ ノナカ シノビ ツカヒ
- 一 上杉景勝會津表手配の事カゲカツアヒツ オモテテシヨリ
- 一 東照宮小山の途中より竹を伐せし事ヲヤマ トチウ キラ
- 一 伊達政宗膽氣相馬の城下へ宿せし事ダテマサネタンキサウマ ヅツウカ シマラ

- 一 竹村半兵衛田中長胤と押し止る支
- 一 岐阜城攻の支
- 一 森寺四郎兵衛飯沼小勘平と討つ支
- 一 南部越後母衣申とぬつづり支
- 一 兼松又四郎一柳の陣見切の支
- 附 兼松武功言上の支
- 一 山田多門兵衛幼年功名の支

常山紀談卷之十二

備前國 湯淺新兵衛元禎輯録

○関白秀次生害の後細川忠興の家小罪蒙るべし支起す其子
 細い秀次當時の大名財用乏しくする潜小金銀を貸すこと
 あり是人の心をどうんが為且財と利せんが為なり忠興も
 黄金二百枚をうてらんが彼家金銀出納の支と司どる人急ぎ
 彼金返しめし券契と破り捨てし左かうんらの太閤の奉
 行小券契と出さへしとそゆる忠興いふも叶ふべし此支
 太閤小池聞えが罪科又處せし人支疑ひあふいふも其年
 案ト煩ひ長臣相集りて議するふ松井佐渡守申する其年

頃徳川殿の御内ある本多佐渡守正信と親く相語らひ彼は付
て徳川殿と頼と忝らせん徳川殿のける頼母とてはうくおりま
せいの程は是程の更みと人の家亡んときるを見捨ぬる更みは
と申忠貞我日比内府と親くもかゝ斯る更頼むの便あり
ども汝正信と親かかんふ試み計り見よと申松井本多より
ちのくの更有と申徳川殿聞しる其後松井と名を人とのけて
尋問をひ正信して唐櫃二ツ開けせらる一ツは黄金百枚づと入
らまゝなり其黄金の箱の題より年月と見よと仰あり正信是を
考ふふ九年の前未三河の御座ありし時ふいと申徳川殿松井
に向をせめひ凡金銀の出納の司ある更みとて若人知まば用ひんと

その時小吾心か任とてしはまは此黄金を貯る更斯る事を待り
年久し今其家の為小吾年比の志達しることを嬉しむとて自
是と松井小賜ふ松井大は悦びくか有とて御更をいふは既に
亡んとする家の斯再び繼ぐは更偏は君の御恩なり細川が家
のいもん限いりて此情を忘奉るべき速は本國ふ下して黄金
め上せ償ひ奉るべきといふと申 東照官聞し名づやく
此更世は世聞えあふる両家の禍にこそあま夫故小斯人知まば
用ひる料の物取出しはれゆをく償ん更然るべきと仰らま
ふ松井殊更小悦び急ぎ歸て此由を申しんとて御前を立て
出まゝり遥經て忠貞其更とて御館小忝り御對面の序は正

信と呼出し 東照宮小向て中々々々年頃忠貞が家人の仰下らん
一々謹んで承り何々のありやんをさあめいさかども若御家小
事有ん時の必君の御爲國と身をも捨て此度の御情小報
奉らんむらめくいけりながら忠貞常又伺公仕いそんえ本意を
遂ん支叶えんべ是より又素の如く疎々くそをいづれを
御暇中て出ぬささへ年頃忠貞 東照宮と親しくづりて利
長と諫争せり故小利家も一向我家の支思ふこと心得と
忠貞のや旨小後とさへし

○慶長四年大坂小在る諸將の中福嶋正則浅野幸長黒田長
政已下七人石田と不和あり人々使を以て朝鮮小有一時各力を

尽し軍せし目付に定らし福原右馬助直高垣見和泉守家
純熊谷内藏元直陳大田飛彈守政信亦私曲を構へ太閤小達せ
ざりし支とむと憤りて罪科小處をさす由中やうさより支起り
て争論甚しく使度々小及へり七人の諸將此支をさす止むとや石
田と討亡しても必所存を遂げし趣と石田聞て上杉景勝と
いづれと問上杉も案ト煩ひし佐竹義宣日頃三成と親
うらうらと是と聞て伏見より大坂小赴き三成が許小到に別り
存る旨もあし只徳川殿小告て和平の支と頼むべし外謀有
づらばとて三千計の兵と以て三成と伴ひ伏元小赴きと
諸將支と延し故石田と逃しはるしとて既追りけんとせ

らまじし早伏見に着くと聞えり歯とくみくを止り
東照官聞し名太閤在世の時ハ寵と頼とく權威小誇り無
礼も有ぬべし今ふ當つて諸將のやうく処其理あらふ
らざれども罪の疑いハ輕くせらるや聞ぬとて強てあざむ
らざれども尚止むくらば今世治りしるふ弓箭と起
えんとや力あると更とりて我石田と心と合せ諸將と軍と
仰らまじしふより止更を得て怒と押へて止りぬ其の
今世の乱とちかぶるも又穩らあらん更も一己の所存ふあ
暫く佐和山に退て公の万更相ふらるる更なると然る
ん子息隼人正の更ハ我より家と全ふせんことを計るべしと三成

ふ仰らまじしふの忝さ由謝して佐和山に歸るるや否景勝は相
計りし景勝我會津に歸りて上らば内府催促有ん其時
悔りしと体と頭して罵る程あは必軍と出さるる行がらふた
やましく打破らまじしや固く支て戦せん其間大坂に討て出
素より心と合さる諸將と集め旗と揚らると是は過る謀あ
るべしとも覺えぬと計らまじしるは三成佐和山に趣くを定
めたる三成が士大将嶋左近昌仲三成に勧めたる秀家秀詮
も両端と持たるるや覺束あは佐和山の軍兵と計る一戦と
決まらふ不足いまだ一千餘と止めく佐和山と守らせ蒲生備
中舞兵庫高野越中と其各二千の兵と卒て風上より火とを

所々と焔とありて攻りたるをたちて内府に引退さん
所と道詰と軍と争う打洩さるる方一ツも志と遂げらるる
潔く御腹をまじり空しく佐和山に退き後悔もとも益あ
らド居るかぐらあつて圖を外さん更口惜くいとつひれ共三成ハ
景勝と相策り故冒仲が謀略と納めて止め三成既ハ佐和
山に趣く及んで七人の大将猶憤り深かりし道に俟て討取
べしと言ふに東照官聞し召今ハ打捨置むや如何なる
と本多正信と名て仰あり正信はよく思慮して今日日本を取
て徳川家の献する者ハ石田とくとも其故ハ三成奸曲ある
故人々悉くくとも又三成不與する者も多く容易く打せらる

故言と礼儀不託し手と徳川家おろりと亡きやと存る人々
以ハ三成今亡て後悉く平均不帰さんや諸将外への殿と敬と
りども内への隙と伺ふ人もいせん故太閤の恩と得る家雄秀頼
お背くに忍びせ三成と憎むの心と移りて殿に懐きやべし三
成あつて殿と敬し重んぜん更愈厚くべし三成久しく人の下
かむべし者いん糸の頼て弓箭と取むと更掌の中におあり三
成敵とまらる足んや其時三成不打勝めむ殿自然に勢い
と得るせめひと誰う靡き従ふべし日本三分の二ハ殿に帰眼
まぐは只三成不御心と付らるる彼と立置まはとてある
べらめとやたるを聞召入られて三成が旅程心言ありとて結城秀

康卿とて送り送らせぬひたり

○東照宮景勝と征伐し関東へ向らせぬ時江州水口へ御泊あり

其明の朝長東大藏大輔御膳と奉るる事とて御約束あり

し夜四頃俄水口と打出させぬ御輿とかく者出合たりけ

る渡邊忠右門守綱草鞋脚半がけり御輿のうへくと

うひたりと誰そと仰らるる渡邊忠右門とていとやと聞

名何とてかく不意に打出ると知るるどと御尋有るる若年

の時より御傍へ仕へ奉りし身の是れをのまんと仕まつる情

あり御詞たりとてやたる忠左門宵よりかくあつんと押り

て御輿のつちと枕あり臥居りたりとてや其夜土山へ着せ

あひと翌日水口へ昨夜時と取らるる早く立ちひたりと仰
遣らるる

○東照宮景勝征伐の御時小山あり石田兵と西國へ起ると聞

し名前より景勝が勇将ありあり西國へ皆敵たりと人々驚き

たりし花房助兵衛職之と名で汝の近年佐竹が許し有て義

宣が心より知るるんかると乱ふ二心有て軍と出りて帰る道

とて塞ぐべし又義宣謀反の志ありとて起請文をか

き我不見せしと仰らるる花房承り義宣のききめと信

のあつと入るる別の子細をいはいし只人心の反覆の父子の間

も計りごとく度不の起請文の御ゆるされと蒙るべしと申

東照宮助兵衛ウキダの浮田ウキダが家の長臣オヤウシと聞キくキりキの器量キリヤウの小三男チヒサより
よとて大息オホイキはぐとあふ花房ハナフサかくと後小傳ウシヤウモシへさく口と起請文キシヤウモシを
書カなカらカば佐竹サタケ二心ニココロありと軍兵の疑ウタガハシと散チヂとん為タメの仰オウありふ
察サツとぐと起請文キシヤウモシと書カけりカくカくカを口惜クセくクくクくクの義宣軍ヨシノリ
と出デしシるルとも我何の罪ツミに有アべきと深く悔クハくクるルとぞ

○景勝セイショウと征伐セイバツせよとたまふ時七月廿四日 東照宮下野シモツゲの小山コヤマに
御着陣オモツクセンありける處トコロふ其日伏見フシミより石田三成イシダサネ佐和山サワヤマと出て大
坂イサカに至りイ諸大名と相謀りアヒカ乱ランと起オコすの旨告奉オモツケる則先陣スハキセンの諸
將トウダウと名ナを東條法印トウジョウホウイン津田小平ツツダヘイ太本多中務ホシダ大輔オホノボ井伊兵部イイヘイ少
輔オホノボを以て今度三成兵とあぐる間定て妻子ウチノコとらと悉く押オシ籠カケ

心中シナウの難義ナニギ察サツせよとぬ且豊臣家カトトヨトミケのふぬ企クハる旨オモツケありとぞ
秀吉ヒデユキの恩オンと請ウケる人々多々オホシれとぞ大坂オホシは趣オモムき妻子ウチノコの片付カタマ
又マタ三成サネふ心ココロと寄ヨセらる人も少オホシくも遺恨イコヒにあアらんと仰オウ出デされけ
り皆みな疑惑ウタガハシや有アらんカとくカの詞コトバかりカるカるカ上杉義春ウヘスキヨシハル入道ニラダウ入イ菴アン
末席シマセキ小有スミが進スミと出福嶋フクシマ正則マサノリ加藤嘉明カトウキアキ黒田長政クロダナガマサ小向オホカの各オノオノ
思慮シリヨを及オホシぐとく人々オホシと三成サネ小出オホデ一置オホキ只今御味方ミカタ方カタ
て其質シテと棄ステば妻子ウチノコの恨世ウラミの誹ソシガものぐとく秀頼ヒデヨリ公へ出イ置イ
置イる人々オホシと三成サネ横取ヨコトリ小とるあどば三成サネと一戦イツセン小及オホシが共
妻子ウチノコの恨世ウラミの誹ソシガも有アべとく人々オホシもあれ我オホシの先御手サキオモテとひさ
討死ウチシと遂トクべとくやえれとく皆みな一同イツドウ小御味方オホシ仕シるべと決定ケツギ

しぬ其座サ不是かどの支辨ワキへざる人ヒあまのりシるも素モトよ
るあまのりも時にあざりて義春の片言シ拔群ハク不聞クえると

又一説ト一座イいさごさうくとやさるる處ト福嶋正則何とて
石田シ田タは従シひく弓箭ユミヤととらんや秀頼公に疎遠ソとよあり
あまのりシの神明シ誓チひく正則御味方チとらん支モ勿論ロありと
いさごさうと故皆一決トしとるもさうり

入庵ニ上杉弥五郎とて越後上条の城主後民部少輔とて
景勝の姉婿アネムフなり

義春ノ能登ノの畠山義則の弟ノなりと五歳の時より謙信モトヒ貫ニ
置オカまカと上杉定實の養子ヤウシとせしむるなり

謙信センジンの先陣センザンれ大將オホシラとて武名ブナイヨ世タカ高カゲ景勝カゲカツ新發田シハタ因幡守治ハタ
長オホムホシ謀ム反ホンと討ウツて新發田の城下シハタはあつとつと時治長切て出景

勝カツの先陣センザンと放生橋ハシとて追崩オウクツ景勝の旗本の先ハ有ヒが日の
丸マル旗ハタと取トルて三十間サンジュウカンづゝ先ハ押出オシデ手廻テマの士シもありとせ
鎧ヤリ袢フスマと作ツクて待マチけける故治長引退オヒウチくと追討オウチありる勇將ユウシヤウ

なり大坂冬陣フユジンに二條の御城御書院ニジョウに諸大名出仕の時
東照宮入菴ニラアンと名上杉家の武者ウヘスキケありの支シも御尋ミロあり入菴ニラアン詳シヤウ
不答コクへ奉ホウうと聞クし召上杉家の軍法素グンホウモトと聞及クびる支シも

深く感カン入ぬと仰オホあり諸大名列坐レツザの真中マナカに入庵ニラアン小男コオトあるが
言語分明ジゴフンミヤウ小其次第オホニ誠マコト不懸河ケンカの如ゴトくあまのり諸將何シも武功ブコウ

智謀の人々あまど詞と出せりのかく深く感入るる色あり
々々々々々

○同ト時國清公コラセイコウ參議輝政フヤマ 小山ふかりコヤマ 大坂の北の方ふ誰タレ
使ツカヒまぶきとて慶長五年七月廿四日長臣チヤウジンと名て其姓名セイメイと書て
出デせと仰オウらふ各奉りぬとて其明アカ朝書アサカキツケ付て出デまふ渡邊惣
左門ササエと名てあコカいふ公コウも左の袖ソデより出デせめめコカ同ドウがく渡邊ワタナベと
記シさせめいといふクハシチン患難タヘと堪タてまツカヒ使ツカヒまぶき人ヒトなりと
人々思オモへる故ユエかりゆふとて渡邊ワタナベと名て此旨コトと仰オウらふコト此コトの
大夏オホナツの御使ツカヒりていと辞ジしやい衆議シユギイシツケ一決イツケツし上ウりコトの論ロン
及オびコトの仰オウと蒙カウフりさてい今イマ一人添ソクらまヒトの病ヤマトと申マヒまふ

バとヤ々々々野中市左門と相副アヒスらる書シヨ二通ツウと渡ワタせめいコト仰
と承ウケりコト程ホドなく東西シヤウヒの戦シタケあるとふ大坂オホサカ不オモ赴モく夏ナツとコトり
らぬ色イロの見ミえコト々々コウ公コウ々々コウ関セキ所シヨと通り得エる若モシ殺コロされコトら
吾馬ワケウマの前マヘより討ウチ死ジしコトありコトたコトりコトありコトて大坂オホサカ乃
屋敷シキに到イダらば今度イマジンクヒの一番首取イチバンクビらるもコトさコトべコトの詞コトバより二
人下人メシダも召具メシグとコトば七月廿五日小山コヤマと出デて其比コト三河ミカワの吉田ヨシダ公コウの
領地リョウチなりコトは巳ミが宿所シヨクシヨへも立タちコトらコトる笠カサとコトりコトあコトけコトく忍シノびコトく打
まコトぎ尾州ビシュウ熱田アツタに到イダきコト船フネ着ツキふ大竹オホタケの虎落モガリとゆコトひコトく守マモり
神職シニシヨクの大原オホハラ左門ササエ大夫ダイフハ渡邊ワタナベが知チるコトようコトみ有アりコトて潜ヒソカみ立タちコト
りコト爰コトより大夫ダイフが下人ゲヒト竹タケとコトりコトげコトるコト一イチ把カらコトりコト付ツケて七八町計ハチカウり

先達て此と云ふ一ふ案内者として伊勢の境小行て夫より野
山も皆敵の中と忍び通き飯とをへさゆもなくあり米と
かゝる関の地蔵不行着ぬ行あふ入るふ何や一もあらし関所を
殺さるる心得らるる口々より関の有様傳(きく)か
かうく通さるるさゆの思ひもよる伊賀越(イガゴエ)やかかると淺
越(ゴエ)や行(ユラ)と二人打(ウチ)くして先伊勢の大神宮の祝上部
近(コシ)が許(モト)小行(ユキ)て宿(ヤド)と借(カ)んと立(タ)より今(イマ)何(ナニ)方(カタ)より泰(マ)リ詰(マ)る人
のあぶきとと取(トリ)あぶき左(サ)近(コシ)立(タ)出て一宿(ヒトヨ)の更(マ)ははく置(オキ)ぬと
出(デ)よ棒(ボウ)めくたきと出(デ)と馬(ウマ)りたり二人あ(ア)き奴(ヌ)らあ(ア)ま(マ)池(イケ)田(ダ)
家の恩(オン)と請(ウケ)る身(ミ)あ(ア)るふと怒(イカ)るもせん(セ)ん空(カラ)しく立(タ)出(デ)る

時左近追ついて何國の人を問池田三左門尉が士あめと答ふ
左近(ササネ)あ(ア)る(ル)川(カ)堤(ツミ)の下(ノ)小(コ)食(シ)の(ノ)ま(マ)る(ル)む(ム)ち(チ)り(リ)て
待(マ)た(タ)し(シ)と小(コ)聲(コエ)あ(ア)り(リ)バ(バ)三(サン)人(ニ)さ(サ)る(ル)様(ヤウ)もあ(ア)る(ル)とて(ト)つ(ツ)つ(ツ)詞(コトバ)の如(ノ)く
あ(ア)る(ル)夜(ヨ)あ(ア)入(イ)て左(サ)近(コシ)来(キ)り昼(ヒル)の乞(イ)食(シ)ハ何(ナニ)國(クニ)もあ(ア)る(ル)と(ト)聞(キ)て
あ(ア)る(ル)あ(ア)り(リ)と(ト)り(リ)み(ミ)さ(サ)る(ル)ひ(ヒ)ら(ラ)る(ル)相(ア)約(ヤク)し(シ)と左(サ)近(コシ)が家(イヘ)の裏(ウラ)戸(カド)よ
り内(ウチ)へ入(イ)り奥(オカ)の二(ニ)間(マ)あ(ア)る(ル)疲(ツカ)れ(レ)や(ヤ)あ(ア)る(ル)左(サ)近(コシ)今(イマ)の時(トキ)家(イヘ)に
あ(ア)る(ル)下(シ)入(イ)る(ル)打(ウ)ち(チ)く(ク)だ(ダ)と(ト)あ(ア)る(ル)孫(ムス)バ(バ)昼(ヒル)のど(ト)く(ク)あ(ア)る(ル)げ(ゲ)る(ル)更(マ)
と(ト)中(ナカ)へ(ヘ)あ(ア)る(ル)の(ノ)を(を)飯(メシ)と(ト)あ(ア)る(ル)め(メ)出(デ)一(ヒト)夫(ウツ)婦(メ)給(キ)仕(シ)と(ト)あ(ア)る(ル)り(リ)
さ(サ)く道(ミチ)の更(マ)と(ト)問(ト)浅(アサ)間(マ)越(ゴエ)入(イ)る(ル)往(ワ)来(ライ)あ(ア)る(ル)れ(レ)バ(バ)此(コ)頃(マ)女(メ)乞(イ)
食(シ)と(ト)殺(コロ)す(ス)中(ナカ)々(タ)通(ト)り(リ)ぐ(ク)ら(ラ)る(ル)一(ヒト)命(イ)と(ト)け(ケ)物(モノ)あ(ア)り(リ)て伊(イ)賀(ガ)

越トホと通トホらまらへつるハバゆぐと荷ニぐらとあひ敵ヤレらつゞき
身をかり御オハヒ杖箱ヒツと笠カサおは多シ刀ヤとも左サ近コシグ許モトおあといと見
くらフキき小脇モトメぎと求モトメ出イダして指サシぐらりかしてアカ曉ウキ宮川ミヤカハとら
渡ワタり関所セキシヨ近チカかりと見ミきバ通ツぐとやうどあひかぐ一イツ封フウの書シヨ
とフカダ深田フカの中ナカ深フカかく埋ウツみ其日ニヒハ行ユキ暮クて山ヤマよりあくる朝アサ
一通イツツウの書シヨとあつりあつて青アヲ草クサとらうと二三ニニの印インと笠カサ乃ナ緒フ
として一セキの関所シヨ行ユキり固カタめたる士シどもかふる大タイ亂ラン伊勢イセ小許コサ
る者モノやあふそき打ウチ殺コロせとひめとらうり二ニ人ヒトハはらうがばやうより
伊勢イセは詰マツて此ココさうとふ及オヨび一イチ夜ヤの宿ヤドとらうはぐらうと法の令ホウレイ
にシよりシづらふ泊トぐとやうもあつて進シム退クシきハまりてハ大坂オオサカの妻子サイシ

も心元ココロなく天照アマテラス大神オホカミとたのふハやうにせ歸カエりゆとたむらうらう
ゆぐとて荷ニぐらと御オハヒ杖箱ヒツ脇ヒツぎの鞆サヤと打ウぐと髪カミとやうや
帯オビ袷アセつらうらうでも改アラタ見ミてあやまき直ナもあつて通トホらるハ
夫ウチより次ジの関所セキシヨとも直ナゆ多タあつ打ウチ過スて大和ヤマトの奈良ナラ小出コデて寺テラに
入サケり酒モトメと求モトメて飲ノミらうらう住持ヂウヂの僧ソウらうとよとて別ワカれり
酒ウチと出デり又マタ薄茶ウスチャとも出デり多タ悦ユクんで二ニ人ヒト腰コシおつけらるゼニ錢ゼニと
あつらう小僧コゾウ多タとて請ウケ取トび其時チウチ住持ソウの僧イシヨク乃ナ日ヒ能ニたむ
くらくコと爰コとくかんとタあつたあつて爰コとく忍ニい来キる人ヒトもゆへ
皆ミナ関所セキシヨとて殺コロされいよくたむらうめへ故コトある人ヒトとおちえをうと
語カタとバ二人ウチ心ココロの中ナカ打ウチ驚オドロとらうらう伊勢イセ小森コノりたる物モノ語カタり

しく天照大神不助らして無事下向せらるる事と此より
後もかくあんと氣づかりしと答ふ僧はぐと聞て
是と信ぜざらんハ別の夏もいまだ関所と夏故あつ通
らざらんハ朋友とちハ奈良の出家ハ見つけらるるの哉と
語られし二入見らるるトと打笑ひ出て行奈良と大坂
との間小関所あり何者ぞと咎めらるるハ又前のごとく伊勢小
参りたる歸路とらへばはらぐと改りあやまし夏もか
ら通らざらんとし処ハ番の坐上ハ有るる老人物かいたせそ
是非と論じらるる及ばし斬て捨すと下知しらるる未座より真の
参官の者と見えしと斬て棄バ神の祟も恐ありと再三いし

うバ二人ハ危き所とのがして大坂小行着り東國方の諸將
の屋敷ハ虎落ゆひたり大坂の兵士門々を警固して内外
に出入り絶えし兼て知らる材木の商家小行て大根を買ひも
し聲を聞知ると打廻りて大根を賣る真似しる久保田
市大夫窓より見てへり小渡邊ハ似たる人もわらうかとつひて大
根と一聲よむ渡辺久保田ハ窓の下より行きて笠をとら大根を
けり出せ内小宿を問へばと答て材木屋が許みせらるる
る野中ハ斯と告て悦びあり若原勘解由北の方ハ属て有る
久保田くとい門を守る大坂の士ふところ薪を荷ふ入夫
三十五人を出し其中一人を残り渡辺と其らう薪を荷ひ

て陣トホと通トキケイゴる時警言固シの士此男オトコへ今朝出コシテウる者不オシあらずと押オシとめ
らる久ヒキく煩ワツラひて打ウチ臥居マシらるが快ヨクくて今日出コノヒる人夫ニジブありとい
へども更サレ不聞入キど勘解由立出カゲユてさあぐふつひ断トワり通トホり得エく
北キタの方北マキ前マシ不コウ泰コウり公コウの仰オウとくぬぐくと述ノビて笠カサの緒ヨとどめて奉
る北キタの方マシハ簾スレと隔ヘて對面タイメンあり其後渡邊ワタナベ不ロク禄ロクまゝあゝをぬひ
賞シヤウとくく夏オホカタ大方マコトあゝん誠マコトは危アヤフき所と道ミチを得エる夏オホカタも
○東照宮會津と伐ウタとめし時景勝キョウセツ謙信ケンシンの影堂エイダウの前マヘより諸將シヨウシャウ
士卒シソツふ二心有ニシンまがきよの起請文キシヤウモンと書カせ妻子サイシとハ會津アイツに
燒草ヤキクサと積ツミ置オケり敵寄テキヨシ来テらる逆サカとせんとて所々シヨクの地形チキヤウとふ
らる白川シラカハは安田ヤスダ上総セソウ今と先陣センジンとて嶋津シマツ下々ゲク齋サイと二陣ニジンと

景勝キョウセツハ只一騎背セ炎エンの嶺ノボ小登コトり樵夫シヤウブと案内者アンカイシャあり山中ヤマナカと通
り白川シラカハの境サカイ乃明神メイジンふ出イ兵ヘイとらる不意フイと討マツてかゝる道ミチと
計カらまゝ上杉ウエスギ方カタも此コトとあぐばまゝて寄手ヨシテハ露ツユもあぐ
東照宮オウショウミヤの先陣オホタハラ大田原オホタハラと陣マして白川シラカハより一日カウテイの行程カウテイと景勝キョウセツ
大オホな悦ヨロモて其勢キセ八千ヤチヒサと率ナガヌマる長沼ナガヌマ陣マし寄手ヨシテ白川シラカハふ攻セメ入イ時山
中カナロの間路カノロより思オモひをよぬ後ウシロにゆり東照宮オウショウミヤの御旗本オウモト切
て入り萬死マンシ一生イツシヤウの軍イクサと謀ハカらる小石田コイシダ兵ヘイと起オコまのよ聞キえ
く東照宮オウショウミヤ宇都ウツ都ツの小山コヤマより引ヒキくへさあひたり
○會津征伐アイツセイバツの御時ミトキ 東照宮オウショウミヤ下野シモツネ小山コヤマの途中トチウより左右サイウの近習キンシユの
人々ヒト向ムカをせあひ我ワガ麾シとせまゝありあれある小竹林コタケヤシふ串クシとあるべし

細竹と切きと仰らましスナキキらば則切て奉らまキリサキさる紙と取出さホシメ分
 るクラマヘひ鞍比前輪ウチヤりあしめて切裂てウチヤらるウチヤと村ニツツ打ありぬウチヤ景
 勝ウチヤを打破らんウチヤは是ウチヤまウチヤくウチヤ更足ぬウチヤとのウチヤり實ウチヤふウチヤ磨ウチヤとウチヤ
 此ウチヤまウチヤあウチヤのウチヤあウチヤべウチヤ上杉家ウチヤの父ウチヤより己来武勇の家ウチヤよりウチヤ景勝
 驍將ウチヤあウチヤまウチヤ人々ウチヤあウチヤやウチヤあウチヤむウチヤころウチヤあり故景勝を侮らウチヤまウチヤあウチヤのウチヤ機
 と示ウチヤまウチヤあウチヤひウチヤりウチヤやウチヤ然ウチヤるウチヤ処ウチヤふウチヤ西國中國ウチヤ一同ウチヤは御敵ウチヤなりウチヤとのウチヤひウチヤあウチヤ
 小山ウチヤより引返ウチヤさウチヤまウチヤあウチヤふウチヤ時又彼竹林を過ウチヤさウチヤまウチヤあウチヤふウチヤ上方ウチヤと攻
 破ウチヤらウチヤ此ウチヤ磨ウチヤも無用の物ウチヤとて棄ウチヤあウチヤひウチヤころウチヤ前後ウチヤふウチヤ大敵ウチヤあウチヤまウチヤあウチヤ人々
 愈疑ウチヤひウチヤあウチヤまウチヤあウチヤるウチヤ故ウチヤのウチヤ猶ウチヤ々ウチヤ恐ウチヤるウチヤに足ウチヤらウチヤのウチヤ機ウチヤと示ウチヤまウチヤあウチヤふウチヤあウチヤるウチヤ也ウチヤ
 ○同日時伊達左京大夫政宗ウチヤハ急ウチヤぎウチヤ本國ウチヤへウチヤ歸ウチヤりウチヤかウチヤらウチヤめウチヤ手ウチヤより攻ウチヤ入ウチヤ

仰と奉り大坂と打立夜と日ウチヤはウチヤたウチヤぎウチヤて馳下るウチヤ白川
 より白石ウチヤまウチヤあウチヤるウチヤ皆ウチヤくウチヤくウチヤ紀ウチヤの中ウチヤなウチヤまウチヤいウチヤ道ウチヤあウチヤまウチヤあウチヤるウチヤ常陸國を
 廻ウチヤらウチヤくウチヤ岩城相馬ウチヤふウチヤらウチヤくウチヤくウチヤくウチヤ國ウチヤへウチヤ歸ウチヤらウチヤんウチヤとウチヤすウチヤらウチヤまウチヤ相馬ウチヤまウチヤ
 累代ウチヤの仇ウチヤ然ウチヤるウチヤふウチヤ政宗ウチヤ僅ウチヤふウチヤ五十騎ウチヤつウチヤり引具ウチヤらウチヤくウチヤ常州ウチヤと經岩
 城ウチヤと相馬ウチヤの境ウチヤにウチヤ到ウチヤり先相馬ウチヤが許ウチヤふウチヤ使ウチヤとウチヤて此度德川殿上杉と
 征伐ウチヤしウチヤあウチヤまウチヤより政宗ウチヤかウチヤらウチヤめウチヤ手ウチヤより向ウチヤふウチヤべウチヤとウチヤよりウチヤの仰と承りぬ
 路既ウチヤふウチヤ塞ウチヤりウチヤらウチヤるウチヤかウチヤらウチヤまウチヤあウチヤるウチヤくウチヤ此地ウチヤへウチヤ馳ウチヤ着ウチヤぬウチヤあウチヤらウチヤふウチヤるウチヤやウチヤめ
 て道ウチヤとウチヤちウチヤゆウチヤ名ウチヤ疲ウチヤまウチヤいウチヤ願ウチヤくウチヤいウチヤ城下ウチヤへウチヤ旅館ウチヤとありウチヤくウチヤ色ウチヤ馬
 の足休ウチヤめウチヤくウチヤ明日國ウチヤへウチヤ歸ウチヤり入ウチヤらウチヤんと存ウチヤぎウチヤとウチヤいウチヤくウチヤせウチヤらウチヤり相馬長門守
 義胤ウチヤとウチヤまウチヤあウチヤるウチヤ運ウチヤのウチヤ尽ウチヤらウチヤるウチヤ更ウチヤぞウチヤらウチヤらウチヤるウチヤ伊達ウチヤハ

相馬の年比のうきまきりてや味方討人一方の大將承りしと
りよりのせいでく今宵一夜打して案内をぬ奴原を一人も残ら
ざ討取て年比の仇を報ひ又今度の賞も預らむやとて頓て
民家をあつらひく迎へ入る人々を集て夜討の評定しきりたり
爰小水谷三郎兵衛といふ者るるの末座にひくろぐ進み出
末席の異見恐入てりども既小會議の座を連りていへば所存
を殘さざるふあつて抑窮鳥懐に入時の獵者もくまを殺さん
とろをやり政宗あつての大將年来の恨をまてく君を頼り
來りてたむらぐやとくと討せん支勇者の本意あつ
ば長き弓箭の瑕瑾あつどや又彼が國境駒が峯に至らん

行程僅か三里多ふ日未だ未の時ふがうに政宗が國に入る
がふ思えぐ日夕あつどるあつて至るべしと僅の勢を止る支
深慮あつどるがうんや只此度いよれば警固して國を返し重
務く戦ひの臨せん日勝敗を天運にまかせらるべしやと
うまの一座の人々此議小同ト兵糧秣を塩魚小至りては
を置くを焼て夜廻せん義胤が士ども政宗あつりて志が
かりりりりる休を心あつどるがうに試んとて夜あけく後馬二
匹よりあつち人々走りゆく以の外小らるのしる政宗小
童一人小燭りてせ白く小袖を上げ打つけ左の手小刀を上げ
立出相馬殿の御人やいといふ是ふいとして行向へば物音高く政

遠ざけらるる竹村静少歩より別の子細もいさぐお留
中せと三九門下知し云もあへど左の手よて長胤と
ひいとさく一尺計の脇指と抽て長胤ふお當り従者も
この口惜やと怒まどもせんうな竹村詞をうけ近くよるま
なが吾を殺さる共民部殿を刺貫るやん唯あゝあや
めとめく別の支いいぐんと呼りりる処は百姓の家も伏置
る鉄炮の者どもうけ集り鉄炮と長胤ふお當て竹村を
討んとながふ忽ち民部殿を打落しやんと聲々ふ呼りりる
長胤力あく竹村は従て百姓の家へお止て四方を堅く守
る多りかくて 東照宮聞し名父既ふ味方へ成る上いゆしと

と仰らるる長胤則出らるる後公小遭て手あゝと
有とぬあもあつせめいなるよせいとんしとや

○岐阜の城を攻る軍評定の時國政公大手に向とんと仰らるる
ふ福島左衛門大夫正則聞て吾を今度の先陣あまそ我
あらしをえんる井伊本多公小向ひく内府の御縁者あり議
らるるくと有とるまば正則ハ尾越より西美濃に入て大手お向ひ
公ハ河田の渡より寄るせめあま定まらるや、有と正則搦手
へ吾を向ひいども尾越ハ城も遠く河田ハ遠浅あまば馬を
涉り易らるるべし大手お向ふも城を早く攻破らん為あれは只搦
手よりせんものごとやとまらるるを井伊本多正則の領地か

まゝ大手より船筏を以て渡さん夏安うぐへ三左門尉
はかめ手より向ふまゝ之既定はる上の今更くんも然る
うぐへとやまゝ一ぐへ正則さての吾敵地ふ入て相圖の煙を
あげて後池田殿川を渡さんよとのゆゆ大手に向りまゝ
頃ハ慶長五年八月廿一日のまゝ宵ぐうたよ公ハ清洲より
出河田のあつらふ陣してあるまゝ廿二日の曉ハ川涯ふおよを
あへ伊藤五郎右門と云の岐阜より津田藤三郎と始りて
新加納村ふおし出して陣して味方の軍兵勇進んでを
川に打入んきなり公馬を乗廻し今まぐぞと下知せを
め此時貝福右門時よりぬとやまゝ公然と一宣ひる

詞の下よりゆりゆく波ふ馬とつと打入二三間歩を鞍つ
ぢふあつらふ貝ふ川水とすくめく打うついづも高く吹
出と宝螺の声諸陣ふひきまゝ是より一同ふ打入て一騎も
残らば向の岸ふ打上る

須賀平四郎物見より一が乗帰り敵の多少ハ芦原ふ隔りて
見えろぐへとま二三千ふいよも過りて軍ハ味方の勝
と申し子細いよと問あへ須賀敵の後陣づぐ後ふ
兵を伏るま地十町計がわふあふも存せど遙よ
うけ来りか人馬の息切まゝとたふとやま
果ぬ伊木清兵衛忠次味方の旗の前にくも陣の色く

ろまゝり敵の後ふ仰て人の面白くい必定味方の勝ありと
いさみたり

公味方の陣を整へよみどり進むると下知ありをれどもあざ
ためしむる吾おとじと進みゆく三町をり公今の時を
よらまると腰に挿る磨と取て一振めをめぐり一同かどつと打
てかろと忽ち敵を撃破らまろり八田太郎兵衛久次北の敵を
追うけろり所ふ朱色の物具着て紫のちろけろり武者一人息
つぎ居るを見て馳寄るりろり武者の立ちなるがひを
折し八田馬より飛下り鎗と合と遂に討取るり是前田半
左門あり

半左門の徳善院の従子うと岐阜中納言秀信の近習
の臣あり打見ろり処いさむまて溫柔めく常に論
ろり家人ありろりる男子にあつばと笑ひよ此日の
軍敗軍の中武市忠元門と二人めを止り引立る味
方とまげまろりつけやほげと呼ろりて目を驚はとろり
して武市も討死を日比前田を悔りろり者どもろり前田
及ぶとさやもあろりろり八田の父と三右門正久とろり
士大将と太郎兵衛今年十八才父の陣代ろり前田を討
取ろり小従者柏原左五門尾関弥五左門うけ来るハ
田と馬に乗せて帰る八田後ろり人ふ語ろりろり年若

血氣チキよろもたふあはば敵一人討取てそのを疲ツカるべしふあは
づりふ其時たぎけ来る敵あはば小児セウニも生捕イケドリとさうる
し死生シセイの間ニ立て敵と討得て却て勇氣ユウキのおとろくする故
ちるべしとど語りたる慶長六年禄二千石を増マシ与へらる
同八年公参議サンギふ任ニト泰内サイノの時久次ヒサタチ太刀の役ヤクより從五位下
ふ叙シヨし丹後守ニヤウと称シも後豊後守アタタと改マむ前田利長マヘダトシナカ久次ヒサタチが
武名ブネを聞キ一ヒト万石マンカクと招マネへしとどさゆりしと
福嶋正則フクシママサノリのオホテ大手ウデの惣大将ソウダイより素モトより他人タニふ超コエらるトと思
ふと一ヒトふ公キミ既スデふ新加納シンカナフより敵と撃破ウチヤダりたりとさき怒イカリりて
て廿三日ニヤヒミツの朝先陣アサヒマして攻寄セメヨセり池田家の軍兵朝日アサヒ口カより攻

入イるル物モノを惣ソウぐるル土手ツチテ上ウより見ミて人の功名コウメイと嫉タウゼン道全ミチゼンと
りる法師ホウシ武者ムシヤふ下知マタチして町口マチカ火カを懸カケせしルが搦手カラムテの
軍兵イクサ烟ケふもむびて進スむ得エむ公キミを御覽ラシドてその心得ココロエぬ志
りざし火ヒのきゆるルを待マツてさうルやとて素木クハノキ畑ハタとめメぐる長良川ナガラ
より後ウシロの水ミヅれ手テふあハ寄ヨセめふ池田吉左衛門イケダヨシサエモンの此城ココロふあハを
時水門トクミヅカドに居イて案内サシのよう知チつ水ミヅめメの有アるルより入イて水門スイカドを
打破ウチヤダり旗ハタと差サシあげ池田三左衛門イケダササエモン尉本城ハシジマウの一番乗イチバンノリと呼ヨりりる
正則マサノリの道ミチを妨サマサりまハ却カクて池田家の奉サマヘあると後ウシロふ人ヒトの
東照宮御書トウショウミヤノミカキを賜タマへり敵軍川テキクンカハと隔ヘて相支アヒサシる所トコロは輒タダく打
破ウチヤダり岐阜ギフと攻落セメオトさシ功コウ名メイ賞シヤウもモらル詞コトバありとど書カせを

おひらる

○岐阜中納言の士飯沼小勘平とつゝの四天王と世ふいとま
 剛の者なり新加納の軍破る一時小堤を前めて居りし
 小池田家の士大将森寺政右門忠勝が弟四郎兵衛長勝飯
 沼と目かけ一間あやうい溝と馬の聲うけくひくと飛
 せうの飯沼が左右より鉄炮を打懸るまごも甲冑にあつて
 其身の手も負むを競ひうらうが敵の多勢はくとも思ひ
 かん飯沼が者どもちるまごふ成ぬ森寺馬を乗寄まの飯沼
 名のもとと詞をかくる池田が内の森寺四郎兵衛と名乗る飯
 沼池田が内の森寺なるべいごとくめうの刀を抽て森寺が馬

おひ下んとくは処と右の膝口を切りし森寺左の方より
 飛下り馬を隔て切合るが又左の腕小疵を蒙り今の叶と
 と思ひく白刃を握り掌とくまおがく無手と組飯沼とお
 らく透さば刺通さうが疲まを首と取まを既入ふ
 奪らるべうし小従者久兵衛とらる者走り来り近づくる者追
 せうの馬小搔のまを奥國公武藏守利隆朝臣の度十四五騎か
 てひくめふ処小森とかくと中は又國清公の御前も泰り
 くと飯沼と組で討ていとやなり
 飯沼が曾い小田原鉢刀の行光の作脇差の菊一文字森寺が
 従者分捕し今森寺が許ふありとらり森寺が飯沼と

討取^{ウチトリ}一^{ヒト}支^シ関^ケヶ原^ケ記^キ其餘^{コノ}の書^{シヨ}うも池田^{イケダ}備^ビ中^{チュウ}守^{シュ}くして記^キ
せらる^セの謬^{アヤマリ}なり

○岐^{シロ}阜^ゾの城^{シロ}攻^クめ池^{イケ}田^ダ家^ケの士^シ南^{ナン}部^ブ越^エ後^ゴ門^{モン}際^{サヘ}小^コ押^{オシ}詰^{ツメ}くふ門^{カド}の
く^クり狭^セくか^カけ^ケる^ルあ^アら^ラま^マ支^{ツカ}へ^ヘて入^{イリ}得^エど^ドく^クふ^フ母^ホ衣^ロ串^{グシ}とぬ
いて入^{イル}だ^ダーと^トい^イふ^フも^モり^リや^ヤく^クた^タと^ト入^{イリ}得^エば^バと^トも^モ此^{コノ}か^カら^ラぬ^ヌく
ま^マど^ドと^ト呼^ヨぶ^ブ其^{ソノ}中^{ナカ}小^コ門^{モン}ひ^ヒく^クと^ト馳^{ハセ}入^{イリ}ら^ラ其^{ソノ}武^ブ者^{シャ}振^{フリ}甚^シ見^ミ度^ド
ありし^{アリシ}と^ト其^{ソノ}時^{トキ}の^ノ入^{イリ}り^リと^トかん

○岐^{シロ}阜^ゾの城^{シロ}小^コ諸^{シヨ}将^{シヤウ}お^オ寄^ヨる^ル時^{トキ}一^{ヒト}柳^{ヤナギ}監^{ケン}物^{モノ}直^{チキ}盛^{セイ}の兵^{ヘイ}一^{ヒト}騎^キ先^{セン}駐^チり^リ
川^{カハ}小^コ馬^{ウマ}と^トら^ラと^ト打^ウ入^イら^ラ直^{チキ}盛^{セイ}小^コ付^{ツキ}ら^ラと^トら^ラ目^メ付^{ツキ}兼^{ケン}松^{マツ}又^{マタ}四^シ郎^{ロウ}正^{セイ}
儀^ギ九^ク尺^{シツ}計^{ケイ}の十^{ジュウ}丈^{サウ}字^ジの鎗^{ヤリ}と^ト提^チ鹿^カ毛^{モウ}あ^アる^ル馬^{ウマ}に^ニ乗^{ノリ}て^テ堤^{ツツミ}の上^ノま^マい^イく

て是^{コレ}と^ト見^ミあ^アり^リと^ト剛^{ガウ}の者^{モノ}よ^ヨ老^{ラウ}武^ブ者^{シャ}若^{ワカ}武^ム者^{シャ}と^ト問^トふ^フに直^{チキ}
盛^{セイ}聞^キて^テ安^{ヤス}井^シ新^{シン}九^ク郎^{ロウ}と^ト今^{イマ}年^{ネン}廿^ニ三^{サン}と^ト成^{ナリ}い^イり^リと^ト答^{コタ}ふ^フ正^{セイ}儀^ギ
吾^ワあ^アら^ラば^バ功^{コウ}名^{メイ}と^トい^イふ^フ若^{ワカ}武^ム者^{シャ}あ^アら^ラば^バ惜^{ウレ}ま^マい^イや^ヤい^イ
も^モ終^{ハシ}ら^ラぬ^ヌ小^コ安^{ヤス}井^シ向^{カウ}の^ノ岸^キに^ニ待^マけ^ケる^ル敵^{テキ}の^ノ中^{ナカ}ふ^フを^ヲ入^イて^テ討^{ウチ}死^ジ
ら^ラ直^{チキ}盛^{セイ}馬^{ウマ}と^ト蹴^ケく^ク進^スむ^ムけ^ケき^キに^ニ見^ミえ^エと^ト正^{セイ}儀^ギお^オ止^トめ^メ
早^{ハヤ}く^クい^イと^トや^ヤ有^アて^テと^ト云^イふ^フ小^コ馬^{ウマ}と^ト川^{カハ}小^コ打^ウ入^イら^ラら^ラぶ^ブ
直^{チキ}盛^{セイ}も^モあ^アら^ラと^ト渡^{ワタ}ら^ラぬ^ヌ敵^{テキ}敗^ハれ^レ北^{キタ}へ^ヘと^ト正^{セイ}儀^ギ闇^{ヤミ}魔^マ堂^{ドウ}
の^ノあ^アら^ラと^ト追^オく^クる^ル味^ミ方^{カタ}と^トお^オも^モる^ル直^{チキ}盛^{セイ}も^モ追^オ討^{ウチ}ら^ラる^ル
や^ヤと^ト問^トふ^フ小^コ敵^{テキ}と^トや^ヤ陣^{ジン}と^ト整^トへ^ヘり^リ引^ヒく^クと^ト一^{ヒト}定^{テイ}味^ミ方^{カタ}崩^{クズ}ら^ラ
一^{ヒト}百^{ヒャク}々^{ツツ}木^キ造^{ゾウ}の岐^{シロ}阜^ゾの古^コ兵^{ヘイ}あ^アら^ラと^ト止^トめ^メと^ト思^{オモ}へ^ヘる^ル地^チの^ノ理^リが

く退くあらん今見らまよ返さべしといひも終らぬ小竹
林ふよりと鉄炮を打く正儀少もけらぐど相向ふこと
まづ有て城兵遂に引退く

一説小津田藤三郎光房の秀信の士あり敗軍の中引返
朱の物具一赤やうけ鹿の角の立物打る曾と着月毛
の馬小乗て引色小成る味方と厮一散々小戦ひるを兼
松見てよに敵なりと目とけく追うけつる其間十間
づつ成る時津田光房引返して城引取る黄母衣
うける武者取て返一正儀とつら合戦ひが相引小引
とつら此時や又前小川を渡らる時の度なりや

なげ

正儀敵是より一面目有小似たり此より返さるといふと直
盛岐阜の町口より将机を倚て鎗を横へ敵出ば一鎗せんと
正儀の方と見ゆまよ小正儀のや敵の出りごと云ふ果
て軍のあつらふら亂るまよ後直盛正儀を饗食し今度
の軍毎度仰の中りといひ中りも安井が討死を察せしむ
いうある子細かいと問き小正儀聞て死生有命とやいてい
で人力の及ぶべしけりかづ川を渉まよ先陣する時に馬の
あげ場二三十間も置て敵の前を横らぬ小乗りあつ味方
のほく時大音に名乗べしとまよたもなきて唯一騎岸小

打上り敵の真中ふうけ入り討死をまじい敵ふ利を得る
あついで時により地より進退の志をさかたりの物なりとよく
老兵ふ承り置いていねどふ六十ふ及て猶かぎり武功も遂
いとを語らまはる

台徳院殿御上京の時熱田より國士御目見小出ると兼
松も同く出らふ土井大炊頭利勝を以て今川義元合戦
の時功名利根山より信長より足半を賜ふ猪子内
匠兼松と年いづまやと御尋あり御覚は猪
子と年まゝと思召とのまあり兼松承り信長義元合戦
の時朋輩七八人一所に打立しが馬と乗をまゐいひまを

見りか鐘を逆掛し心中不吉とあめの日勇まかく
進み兼りか功名よりあ者手とまがごと見苦しと朋輩
ども取らる首の血を甲ふ塗り草摺ふ泥をぬり朋輩の中
交り信長の前ふ出まひ義元の首を信長見て悦む時ふ
泰を合くりき刀根山より前夜觸ありふあまりて信
長とや打立まはる故草鞋をく間もかく蹴りかけ付
首取らまひ信長見て太刀のさやを付らまはる足半を賜
ふ別ふまはるまもかるとや上る利勝猪子と年いふ
と問うまをまはる御見らぐく内匠よりいより二ツ若りと
答ふ利勝御覚を御自慢のまあるまはるまはるとやまを

○ナニナニ

よりのかんとりふ兼松りやく詐のやせんびと答ふるまに
利勝中せんりぶ大は御感有て時服の黄金と添て賜り
るるるを

○河田の渡りて岐阜に向ふ前堀尾信濃守忠氏川岸に陣
せり池田家先陣の士大将伊木清兵衛忠次使と以て池田が
者ども川に打入て後渡りて今度の先陣に池田が兼て
みないとて中なる忠氏聞て暫く馬より下立て吾下知を待
いと云まると山田多門兵衛十五歳軍のくみと始し馬より下人と
けりを従者馬より下りてやの鞍の前輪に取付俯ふ成て待まると
教へる山田志りてりるるや有て忠氏の旗本小室螺声

我先小と馬に乗し山田真先小川に打入て渡りたる
が遂に一番首を取るる従者の物ある故なりと後小
吉晴此日の勝軍れ告とき首帳と見らると首一ツ山田多
門兵衛とありと讀も終らば近頃頃や竹馬小乗
る童のともや功名しるる父ながる居る人ふをいり
悦ぶんと涙と流るる又梯権八が功名のありといり
小討せん知らば功名の二三人の中ととらる者ふありと
り中しとふやがて飛脚來つと権八一番りはるいり
首を取られとて手負て帳小記を支おとらると告り
るる吉晴吾見る所よと違はとれいけり云ま

孝

常山紀談卷之十二終

常山紀略

十三

特 32

557

東 京 圖 書 館

一
〇
冊

三
七
號

七
架

函

雜
史
類

和
書
門

常山紀談卷之十三目次

一 米田助右門見積の事 ヨネタ ミツモリ

一 後藤又兵衛決斷の事 ゴトウ ケツダン

一 合渡川合戦黒田三九爾毛付功名の事 ガフト カツセン クロダ ケツケヨウキョウ

一 神谷小久先登の事 カミヤ サキガケ

一 藤堂玄蕃赤坂町と鎮むる事 トウダウゲンバ アカサカ シヅ

一 寺澤廣高加藤嘉明度量の事 テラザハヒロタカ カトウヨシマキラドリヤウ

一 春日九兵衛見積の事 カスガ ミツモリ

一 村上彦右門先見の事 ムラカミ センケン

一 土方三九郎武功の事 ヒナカタ ブコウ

一 小栗又市谷々見廻の支

一 秀家夜討せんといふ事

一 株瀬川合戦の支

一 稻次右近功名の支

一 浅香庄次郎働の支

一 林半介殿の支

一 伊藤金左衛門三宅平太夫後殿の支

一 毛屋主水物見の支

一 関ヶ原合戦嶋左近討死の支

一 飯尾甚太夫一騎先駈の事

附 成合平左衛門が支

一 蒲生備中父子戦死の支

一 大谷吉隆平塚為廣寂後合戦和歌贈答の支

一 瀧川内記功名の支

一 本多正重の支

一 梶左馬助御書と認る支

一 田邊甚兵衛幼年功名の支

一 辻小作中黒道隨が支

一 嶋津義弘関ヶ原退口の支

附 大坂の商賈義氣の支

一 東照宮勝鬨の儀と延めりし事

常山紀談卷之十三

備前國 湯淺新兵衛元禎輯録

○岐阜ギフの城攻シロビメふ細川忠貞七曲ホソカワタケオキナセガシチマカ口ヨネタへ向ムカへヨネタふ米田助右衛門ヨネタあま見ミゆへミあれ門カド矢倉ヤクラへミやまミく打破ヤブぶミと中ナカに忠貞チヂサ子細コサイいミうふ米田今朝ナカサより矢倉ヤクラより打出デスを箭ヤ玉タマ次第シブふ少スくミなりミいミ本丸ホンマルへ引入イらるル故ユらルと中ナカにミ軍イクと進スめス七曲シチマカ口ミを攻破セらルるル

○岐阜と攻破クハる時トキ黒田田中藤堂クロダタナカトウダウの諸將シヨシヤウ犬山イヌヤマと押オシりハ犬山イヌヤマの城明アケのミ故ユ岐阜ギフと向ムカふミ大垣オホガキより石イシ田嶋津タシマツ二万餘ニマンヨリ打出デスて来キる頃トキも八月雨ハチグヒアメの後ノチ合渡川ガワト水ミヅ

増りし諸將香が嶋の札辻ひひて各將机ふ據り
川もや渡を待てや戦ふと評定して決む高虎銀の天衝の
立物打る曹と着黒あろ掛る武者の黒田家の士大将後
藤又兵衛あるべし存る旨と聞かると扇と揚てちゆる
しうべ後藤あろとゆりうけく来り跪く高虎いふ此川を
とらぶと待て利有とさりと先の程よりいふも決むと云
ましうべ後藤打笑ひ評定も時にし今日岐阜の城攻
後と又爰も一戦なく内府の御面目いふ川を討死の
場ときをめらる人更然るべしあしうべの男子あしうべと
大言すとい諸將尤ありとて川を渡さむと云

○合渡と渡を時長政の士大将黒田三九門可成川の東より遙
小敵と見渡し長政のくく馬と乗よせ朱の枝釣の物
指て黒馬のたくまげある乗るいふ敵必討取る
べしとい長政勝敗運命あしうべとやと敵と討べ
きさあつひそといとまきし可成耳も聞入む川馬を打入
向ふの岸ふせせ上り遂にの武者を切く落し首ふは物と
添て得るりり石田が物め村山利久とい剛の者可成が
此功とむしより毛付の功名とて類きあさ言まなり
○合渡の軍に長政の内神谷小久先がけりて川をこり待りけ
る敵の中ふあつて駈入るは鎧とあふ揚らむ既不危り

と紀長政の軍兵進^スまかろく敵^{テキ}と追^{オツ}てとれんが小女流^{ナカ}る血^チ
朱^{アチ}ふ漆^{ソシ}くると戸板^{トイタ}ふ載^セて長政の前^{マヘ}ふ来^クる小女^{コメ}ふ我^ワと先^{サキ}と
争^{アソハ}ん者長政あ^ルる有^{アル}べくばとおのい長政と^{ナカ}らと見て
小女より先^{サキ}立て鎧^{ヤリ}と合^{アハ}せん者一人もい^ハらばとやろま^ハ長政^{ナカ}
な^ラで誰^シり先^{サキ}がけ^キま^キ手^テ負^{オヒ}い^キの^キ氣^キと^キろく物^{モノ}り^ハ
あ^ハきとい^ハせんろ^ク小女^{コメ}後^{アリマ}有^{アリマ}馬^マの温^ユ泉^{セン}ふ浴^{ヨク}して創^{キズ}愈^{イハ}ろ^ク
○合^{ガフ}渡^ドあ^ハく東^{トウ}國^{コク}方^{カタ}の軍^{イク}北^{キタ}と追^{オヒ}て赤^{アカ}坂^{サカ}ま^カく進^{スミ}ゆ時^{トキ}高^{タカ}虎^{トラ}の
士^シ大^{ダイ}將^{シャウ}藤^{トウ}堂^{ドウ}玄^{エン}蕃^{ハン}赤^{セキ}坂^{サカ}の町^{チヨウ}口^{クチ}ふ^カけ入^イ大^{ダイ}音^{オン}あ^ハげ百^{ヒャク}姓^{セイ}商^{シャウ}人^{ニン}々^々
あ^ハや^ハら^ハま^ハあ^ハら^ハば^ハ惡^{アク}逆^{ギャク}の輩^{ヘイ}を討^{ウチ}平^{ヘイ}げ静^{セイ}謐^{ヒツ}と致^{イダ}せん為^{タメ}あり
皆^{ミナ}ち^チろ^ロも^モさ^サら^ラぐ^グだ^ダろ^ロば^ハと觸^フ通^{トホ}り其^{コノ}後^{ノチ}小^{コノ}家^{ノチ}一^{ヒキ}ツ^キツ^キ引^{ヒキ}壞^クち

東^{マチ}の方^{マチ}北^{キタ}町^{チヨウ}を^ケづ^ツま^マあ^ハく相^{アヒ}圖^ツの煙^{ケリ}と^ケろ^ク高^{タカ}虎^{トラ}大^{ダイ}又^{マタ}悦^{ヨク}んで
傳^ツへ^キ聞^キ古^{コノ}の王^{オウ}者^{シャ}れ^レ軍^{イク}と学^{マナ}べ^バふ玄^{エン}蕃^{ハン}哉^{カチ}と^キ其^キ日^{ニチ}着^キら^キ
一^ト唐^{トウ}冠^{カン}の曹^{ソウ}と脱^{ダツ}て與^{アタ}へ^ラま^シぬ

○関^ツヶ^ケ原^{ハラ}を^ケて 東^{トウ}照^{シャウ}宮^{ミヤ}い^ハま^シる岡^{オカ}山^{ヤマ}に^チ御^{オノ}着^{ダシ}陣^{ジン}あ^ハる巳^イ前^{ゼン}諸^{シヨ}大^{ダイ}
將^{シャウ}地^チの利^リふ據^{ヨリ}て面^{メン}々^ク陣^{ジン}取^ツり^ハふ或^{アル}夜^ヨ諸^{シヨ}陣^{ジン}俄^{ニガ}に^カら^キ
寺^{テラ}澤^{ザハ}志^シ摩^マ守^{シュ}廣^{ヒロ}高^{タカ}取^ツあ^ハる徐^{ジヨウ}に^カ我^ワ既^{スデ}ふ聞^キら^キら^ハい^ハて鼻^{ハナ}
う^ハいて寝^ネら^ハるま^シる廣^{ヒロ}高^{タカ}士^シ六^{ロク}人^{ニン}歩^ホの者^{モノ}六^{ロク}人^{ニン}と物^{モノ}聞^キら^ハる三^{サン}番^{バン}
不^フ互^ゴふか^カら^ハる途^チと異^イなり^ハる小^{コノ}の夏^{ナツ}も必^{カナラ}ず告^{ツギ}来^{キタ}る今^{イマ}夜^ヤ告^{ツギ}
来^キら^ハるま^シる夜^ヨ討^{ウチ}ふあ^ハるま^シる夏^{ナツ}と元^{モト}より知^{シラ}ら^ハる故^{コト}あり其^{シテ}
あ^ハる夜^ヨ忍^{ニシ}び^ク加^カ藤^{トウ}嘉^カ明^{メイ}の陣^{ジン}所^{ショ}と通^{トホ}る者^{モノ}あり^ハる忍^{ニシ}

火付^{ヒツケ}切^キて捨^スて^テ ^{ヨシキ}嘉明^{カキ}其^シ士^シの爲^{タメ}不死^シを願^カは
吾^ワ陣^{ジン}所^{シヨ}の備^ビ怠^{タイ}らむと彼^カへ向^ムて吾^ワを窺^{ウカ}ふと殺^{コロ}せんと殺^{コロ}さる
と勝^シ敗^{サイ}不^フか^カつ^ツべ^ベとて追^{オヒ}たる^{タリ} ^{オホ}追^{オヒ}たる^{タリ}

○九毛^{ムルモ}兵庫^{ヒョウゴ}が弟^ニ春日^{カスガ}日^ヒ九兵衛^{クニヘイ}大坂^{オホサカ}より大垣^{オホカキ}に到^イり諸將^{シヨウサウ}の内^{ウチ}に
二心^{ニシン}ある^{アリ}人の陣所^{ジンシヨ}の有様^{アリ}必定^{ヒツヂョウ}味方^{ミカタ}敗北^{ハイボク}ま^マ陣替^{ジンガヘ}せ^セん
よと三成^{ミツナリ}はま^マむ^ムま^マも是^{コト}を用^{モチ}ひ^ヒど果^{ハタ}して敗^{ヤブ}ま^マる

後^マ前田^{マヘタ}利長^{リチカ}春日^{カスガ}日^ヒとち^チ糸^{イト}う^ウま^マ江^エ戸^ド駿^ス府^フと憚^{ハヤ}り
仕^シふる^ル夏^{ナツ}わ^ワと^トん^ン京^{キヤウ}極^{ゴク}若^{ニヤク}狭^セ守^ウ高^{タカ}次^ジの^ノ東^{トウ}照^{シヨウ}宮^{ミヤ}の^ノ婿^{ムコ}お
る^ル故^{コト}小^コ志^シひ^ヒと^ト乞^{コヒ}招^{マネ}さ^サよ^ヨせ^セ禄^{ロク}千^{セン}石^{シヨク}は過^{スグ}べ^ベく^クの^ノ仰^{オウ}り
より^{ヨリ}と^ト京^{キヤウ}極^{ゴク}家^ケは仕^シへ^ヘる^ル後^{ノチ}岡^{オカ}飛^ヒ驒^ダと^トり^リ岡^{オカ}越^{エツ}中^{チュウ}の^ノ飛^ヒ驒^ダ

子^コあ^アマ

○関ヶ原の時^{子テム}大坂^{ムラカミ}の舟手^{カシ}村上^{ムラカミ}彦右^{ヒコサウ}三門^{サンカ}菅平^{カンヘイ}右三門^{ウサンカ}九月^{クニ}十二^ニ日の
夜^ヨ素^ソ名^ナ小^コ着^{ツキ}十三^{ジュウサン}日^{ニチ}諸將^{シヨウサウ}小^コ對^{タイ}面^{メン}一^{イツ}安^{アン}國^{コク}寺^ジ小^コ向^{コウ}ひ^ヒと^ト味^ミ方^{カタ}陣^{ジン}所^{シヨ}
の休^{テイ}見^ミ及^ヨび^ビら^ラ処^{モロエ}心^{シン}得^{トク}ら^ラま^マば^バと^トり^リ安^{アン}國^{コク}寺^ジ吾^ワも^モは^ハそ^ソを^ヲた^タめ^メひ
り^リく^クま^マま^マも^モ関^{カン}東^{トウ}者^{シャ}一^{イツ}人^{ニン}は上^{カミ}方^{カタ}勢^{セイ}十^{ジュウ}人^{ニン}の積^{ツキ}り^リあ^アま^マば^バ四^シ五^ゴ日^{ニチ}
持^{モチ}て^テと^トあ^アん^ンま^マ必^{カツ}勝^{カツ}へ^ヘと^ト答^{コタ}ふ^フ村^{ムラ}上^{カミ}味^ミ方^{カタ}山^{ヤマ}ど^ドり^リは^ハ有^{アリ}様^{サマ}高^{タカ}く
と^トり^リあ^アん^ンま^マは^ハむ^ムむ^ムむ^ムなり^{ナリ}戦^{タケ}あ^アぶ^ブと^ト色^{イロ}不^フあ^アる^ルべ^ベと^トく^ク下^シり^リあ^アる^ルも
叶^カひ^ヒが^ガら^ラう^ウん^ン東^{トウ}勢^{セイ}の^ノ物^{モノ}一^{イツ}故^{コト}陣^{ジン}所^{シヨ}あ^アけ^ケく^ク見^ミも^モ一^{イツ}兩^{リョウ}日^{ニチ}と^ト過^スべ^ベ
し^シと^ト合^カ戦^{セン}あ^アる^ルん^ン覚^{オホ}束^{ソツ}あ^アと^トつ^ツひ^ヒて^テ帰^カり^リ果^{ハタ}して^シ計^{ハカ}に^ニし
如^ゴ一^{イツ}村^{ムラ}上^{カミ}の^ノ敗^{ハイ}軍^{グン}の時^{トキ}阿^ア濃^{ノウ}津^ツより^{ヨリ}九^ク鬼^キ大^{ダイ}隅^ク守^シ嘉^カ隆^{リョウ}の^ノ許^{モト}不^フ

比森の南より紺地白の旗を挿立敵寄来る
堤せはるまじきと引あがりて立ち處敵の藤堂の先陣
あり旗と堤の下より挿あらしむを見て敵の逃るを以て馬よ
り飛あがり突てかゝるを元親大音あげ鎧と横持引付て
突崩し一人もあらずかゝるべしと下知し十分敵
と引受一同あがりて起立て切崩し追討めりる処は渡辺
勘兵衛押来る六左門散々小戦の鎧もゆぐとるが後小
の敵の鎧と奪ひとるがたゞりかゝる所小元親先陣敗
北一掃部も討と大坂の諸陣皆あがりて三里計の間
援くべし味方もあく元親も久寶寺とらゝり引退るるふ

勘兵衛あらしめ来り鉄炮と搏する三里の間ふて旗竿過半
打折るまじきも旗ぬい一つも捨せざるあがりて城にりる
帰るるる落城の日元親僅に士十二人打具一人幡の方ふ
落りし六左門も從ひり元親汝亦是よりあがりて
落上りしどもいづく道も附そひやさんといひるふと元親
志いざるまじきと遂にうらが為にうらがる間落しとい
ひるが中内一人止りりて其餘は落行り六左門其子孫
今池田家の仕へてあり

○東照宮岡山は御着陣の夜小栗又市露み濡て御前に参
谷々心元あく存ト打廻り見ては上方者何の手もあく

ひと中を聞^キ一召井伊兵部^ニ下知^シく宵^ヨより菅澤次郎^{スガサハ}門^{カド}を山^{ヤマ}うげ谷^ニ見て帰^カると仰^{オホ}ありたり

○関ヶ原の時 東照官岡山^{ツカヤマ}より御着陣^{オホカケ}と秀家^{ヒデアイ}見て敵^{ゲンゴ}の陣所^{チンショ}ありしを見^ミの夜討^{ヨウチ}せんといふなりしに三成^ニ成^ルる大軍^{オホイクサ}ありて夜^ヨ集^ミ利^リありしものごとく中^{ナカ}をたると秀家^{ヒデアイ}後^{ノチ}まじく悔^{クワイ}ありしと云ふ

○関ヶ原の軍此^マ前^マ九月十四日浮田石田軍^{ウキタイシダ}と出^イ一色村^{イツシキ}の兵^{イクサ}と伏^フせ株^{ウラ}瀬川^{セセ}と渡^{ワタ}り中村式部^{ナカムラシキブ}少輔^{シウボ}の軍兵^{イクサ}の陣所^{チンショ}に押寄^{オシヨセ}と鉄^{テツ}炮^{ポウ}を打^{ウチ}くる中村^{ナカムラ}が士^シ竹田五郎^{タケノエ}兵衛^{ヘイ}先^{サキ}がけしと打^{ウチ}て出^イる有^{アリ}馬^{ウマ}豊^{トヨ}氏^{ウヂ}も陣所^{チンショ}相^{アヒ}あつて兵^{イクサ}と出^イて竹田^{タケノエ}討^{ウチ}死^シし伏^フ兵^{ヘイ}も射^イちてまじく敗^{ガイ}北^{ホク}しと云ふ中村^{ナカムラ}が士^シ天^{テン}将^{シャウ}野^ノ一色^{イツシキ}頼^{レン}母^ボ自^ジら

うけ栗^カ毛^ゲある馬^{ウマ}に乗^{ノリ}崩^{クツ}り味^{アジ}方^{カタ}ととげま^カ返^カ一^カ合^アせると

小^コ藪^{ヤブ}内^{ウチ}匠^{シヤウ}引^{ヒキ}と通^{トホ}りたりと詞^{コト}とうけ何^{ナニ}とて返^カ一^カ合^アせざりやと

りしが藪^{ヤブ}ありたりと手^テ負^{オヒ}たりとて川^{カハ}を涉^{ワタ}り頼^{レン}母^ボの鉄^{テツ}炮^{ポウ}あり

たり馬^{ウマ}より落^{オチ}たりと其^{クニ}組^ミの士^シ松^{マツ}村^{ムラ}清^{シヨウ}久^ク頼^{レン}母^ボが

取^{ヒキ}て引^{ヒキ}かり退^{ヒリ}きたりと敵^{オヒ}追^{オヒ}来^{キタ}ると頼^{レン}母^ボが上^{ウハ}帯^{オビ}と切^キ刀^{タチ}脇^{ワキ}指^{サシ}たり

たりと退^{ヒリ}きたり其^{クニ}後^{ノチ}富^{トミ}村^{ムラ}といふ者^{モノ}頼^{レン}母^ボが首^{クビ}と云ふ

其^マ前^マの日^ヒ野^ノ一^{イツ}色^{シキ}藪^{ヤブ}二^ニ人^{ニヒト}國^{クニ}清^{シヨウ}公^{キョウ}福^{フク}島^{シマ}正^{マサ}則^{ノボ}ホの諸^{シヨ}将^{シャウ}の前^{ノマヘ}

へ出^イ岐^キ阜^フ攻^{キム}落^{オチ}ると功^{コウ}名^{メイ}致^シすと云ふ

正則目と見出し怒らざる故に様も仰らざらば
よくい大夫殿のお付羽織のけしきと見ゆらば
式部夏太閤より以来先陣を勤め何きの軍も功
名とげいどく仕りと御目かかんといひしぞ

浮田石田等が軍兵競いり、まは矢野助之丞金の團扇の指
の林文大夫の赤あらしを二騎面もあぐりけ向ひ進む敵
を追崩し、ある有様目と驚うとる赤坂の御本陣より御覽
せし井伊直政本多忠勝の御下知あらしと人数をばしめ
此と株瀬川のせり合ひし

○株瀬川より三成が兵勝小乗て進む處より有馬の士稻次右近

鳥毛の半月のけしき物も殿よりと横山監物といふ三成が士
馳寄て引組より稻次が従者助け来り横山と引伏る処に敵
走り寄て稻次が曹ととり引仰く稻次あり放さんとすか時
従者より助け来りて敵と一太刀斬るかる処に堀尾忠氏の
わりの者より寄て誤て稻次が手の者を切伏て首をとる稻
次の終に横山が首と取又敵とを打ち馬と静小あもせて
東照宮の御陣所より参りたるを御覽して先此陣の
より敵に向ひし武者功名より誰が者ぞと仰ありし
有馬法印より有て豊氏が手の者ありしと中稲次首帳
を記を処小行て従者と味方討ち打て其首帳を消てた

まろりくくともふ聲と聞一召何支ぞと問とめくい子細とやせ
かゝ大軍のみぞと合らる戦いみの味方討もある物よとぞ
仰らまらる

其後稻次まの六千石禄増与へらま八十五才嶋原の城攻ふ
討死きとうや堀尾のちる氏士ども味方と討らる者と
くほり預り居ん支口惜とやぞく忠氏の父吉晴是
とき彼士とびあつと取返して別弓の足輕二十人預け
らまらる

○浅香庄次郎後左奥州葛西大崎の木村小仕へ其頃関白秀
次の不破萬作蒲生氏郷の名越山三郎と共に天下に聞えらる

美少年なり木村家滅て石田小仕へらるが咎と蒙る支あま
し小株瀬川まゝ鼠の皮乃羽織と着銀の大釘の立物打する
曹まゝ中村がちろの士梅田大藏が首と取り大垣小馳歸り
三成隅矢倉小居ら下ふゆいて勘氣をゆるさまといと呼らる三
成聞て能らそ軍あまといひくれば又馳行て三成が軍兵と
引揚らる後小加賀利常と招らる奉公一たり
○林半次郎美濃安八郡青柳村の百姓あり一が石田小仕へらる禄
七百石使番ら石田兵と起すの時佐和山の城中に軍兵とあ
つめ書院まゝ饗礼と行い吾今かゝる一大支と思ひ立運と天
命小任まといふも汝らら武勇といふ小頼む処に其旨と

存ゾじて軍忠あシらぶ賞シヤウの功コふりて一ハ其約束の印シとて酒盃サカヅキ
と座カの中央チュウウより出イる時林遙ハヤシの末席マツセキより進スみ出て軍イの臨シで
一番イチバンのあシらぶ二番ニバンのかくや半分とあシらう一ハ召シまよとて其盃サカヅキと
とろく飲ノミらうられレ皆ミナあシきあるやいよとつひハが株瀬川クヒセか
て一番首イチバンを取トリぬ斯カクて両軍物リヤウジンモノうシまする時稻葉助之丞イナバの金キンの
切裂キリキの指物サシモノとく秀家の軍士の殿シカ林ハヤシの白シロむらへの所シヨりの
指サシて乗ノリさシらう殿シカ一ハるが猶ホドも本多忠勝ホンダタカカツが兵ヘイ小向コカつとく只タ一騎キ
輪ワとくハる有様敵アリサマあシらうと思オモいハらるハ休テイありとて東照宮トウテウ
御覽ゴランどとあシらうと不敵者フテキモノ哉武フ功コ小志コシを者モノのあシの武者ムシヤの
草摺クサヅリとつハけと仰アホ有アリらう

○関ヶ原の軍イれ前日伊藤長門守マヘヒイトサ至孝シタカが大藪の陣所オホヤブより石田イシダ
使ツカと以モてとく大垣オホガキに入イりて一野イツノあシらうとてつハ送オクりハらうと至シ
孝大垣オホガキの行処ユクトコロと徳永トクナガ左馬助サマサ壽昌スチヤウ市橋下ナカサ総守ソウシ正舒マサユとて
とろく伊藤イトウ金左キンサ兩紫リウシあシらうと蛇ジヤの目メれ紋モン付ツケとてうけ三宅ミヤケ
平大夫ヘイタフと唯二騎殿タビニシカ一ハるが十四五騎シヨウゴづり追オツうけらう伊藤大イトウ
音オンあシげ大支シヤウの殿シヨウより勝負シヨウあシせとて引退イヒく三宅ミヤケの馬ウマよ
り下立オリタテ一ハが関トキの声コエあシ駭オホキて馬ウマの口クチふ付ツキらう下人ゲニンとてあシ倒タラとく
うを出イしぬ歩立カチタテよ成ナリて静シヤカよ退ヒくに日ヒの暮クらうらうる處トコロ小正コサ
舒ユの兵市橋ヘイイチハシ勘左カンサ門追カドついで詞コトとて鎗ヤリと合アせんハとて一ハ三宅ミヤケ
と昔カシより親シヤと深フカらうとれハ互タガヒあシる声コエと聞キ知チて夜中ヤチウ誰ナニ

知らざる所トヨ行キあひぬるサレ幸カありてタカ戦カふも何の
功名コウメイあり有アルべしといイハふとて立別タテワカとるヨシ至孝シウカ大垣オオカキ入イて三宅ミヤケ討ウ
まゝカありんとてカむ処カ又カ歸り来カりてカありてカことカといカば至孝
悦ヨクんで鹿毛カカゲなる馬ウマふよシラに鞍カサキ置アて與アへ三成ワツゴシの黄金ワウゴン三十兩ヒキ引出ヒキ
物モノもぞカありたる伊藤イトウの十六七コウミヤウのころより功名コウメイありて赤手アカと手テ
ぬハチぐいマキと鉢巻ハチマキとハチころころテキに敵例テキレイの赤手アカ拭テ又カ出カりてカせよといカれ
一者トキありある時軍破トキイノキヤまカく川岸カハギシと只一人ヒキ引退ヒキ時ウエツカ餓疲ウエツカとる
小敵チキ一人腰ヒヤウあり兵糧ヒヤウとけふと見走ミシり寄ヨシて斬伏キリフせ腹ハラをさカいて
飯イと取出カり川水カハミツふカひカて洗アラひて打喰ウチクひ陣所ヂンショふ歸カりたるカと
○関ヶ原セキガハラより諸將物見モロミと出カると一ハカふ馳歸ハカりて敵或チキアルハ八九萬

又スギの十萬クワダづつナガもいモらんといモふ処モノ黒田長政シメケの物見毛屋ヤ主水モシド敵
一萬タイ以上グンも過ナシいりてコトとカりやカと東照宮チウシャウに御陣所ミマふ参マりて
中ナせば敵の大軍タイグンある處ナシ汝が詞コトバを何ナシやカと仰カらカしカふ
主水モシド兼オヨり凡敵オヨの七八万リヤウありやいシヨウらんといカふも兩軍リヤウの勝負シヨウを計カ
つとく押ミのカケ身ミ懸カケて軍志コウシの兵ヘイの幾程イクホトもいカふ石田イシダ小西コニシが
頼切タシキとる者カシども彼是カシ合カとて一萬計バカリといカふ過カいカば一陣イチ敗北ハルせが
餘ヨの戦シカとて敗ヤとていカべいとカやカと東照宮チウシャウ主水モシドの敵モシドの
内通ナイツウを知シりたる者イ軍の情シヤウかカよカく通ツウドカけるカよカと感カンづカせカた
ちひ御手ミテづカつカる饅頭マンダウと賜タマひたるをカも檀ダンふ有シて此シと食シヨクせ
出カる後カレ彼ホンのセイ本姓ホンセイ何ナシといカふと仰カ有カりてカいカふより毛ケ

屋とやんヤとやせケヤびりやとよホクコク北國の毛屋ケヤとりの所コウミヤウもて功名せ
ゆケヤ々毛屋と姓セイと更カハつると聞キたりと仰モシド有モシドたり主水モシドりや山崎ヤマザキ
源太左クワジケ門ホウコウふ仕テウセシへ後黒田家ヘイアンダウふ奉公ホウコウ朝鮮テウセシもく平安道ヘイアンダウの小
川スミヤカと渡ワタり時味方スミヤカの邊ヘリは渡ワタるモシドやと云モシドるモシドふ主水モシド味方モシドの川
上モシドをわモシドり子細シサイの馬シサイの沓ホシグ草鞋ワラヅの流カガまカガい故サツも察サツしはとりサツむ
長政モウトモ尤モウトモありとて渡ワタるモシドと云モシドるモシドや主水モシド後モシド千五百石モシドの禄モシドあり
此時ハタラの旗奉行ギヤウりガフトり合渡イナキの軍イナキよりイナキありイナキたりイナキ長政ハタの旗
志ナリどろナリは成ナリし時主水ナリ馬ナリより飛トビ下トビり鎗ヤリの鐙イシを以ハタて旗竿ハタとハタり
むナシけ汝等ナシり旗ハタを仰アヲけナシかナシば忽タチ切チて捨ナシんと下知ステしと岩卷イハマキと
つガウる旗ハタさガウりの強トリ力の者トリふ取分トリてトリるトリ戒イシめ主水イシもイシえイシんと

聲コソとかけオシく押オシ立オシたり又関ヶ原カタヒキみく長政カタヒキの旗カタヒキ卑カタヒキき所カタヒキも立カタヒキた
つカタるカタは長政カタあカタとの高カタき所カタに立カタすと下知カタするカタ主水カタ進カタんカタる
旗カタと退カタるカタをカタどカタなカタるカタ敵イキホふ勢イキホひイキホと付イキホりイキホいイキホあイキホんとて遂ツビは旗カタと
立カタ直カタるカタは長政カタ後カタふ此カタ二支カタと賞シヤウさシヤウるシヤウと云シヤウたり

○黒田長政モトの元モトより石田フワと不和フワなりしフワが関ヶ原カクセン合戦マハの前マハもマハり
立カタるカタは士十五騎ミヤウチ明日ミヤウチの軍ミヤウチふぬミヤウチけミヤウチがミヤウチをミヤウチまミヤウチるミヤウチは吾馬ワガウマの廻マハりに
引ヨウきヨウりヨウと軍ヨウをヨウ石田ヨウと手ヨウを取ヨウ組ヨウて討ウチとウチるウチんと用意ヨウイせヨウイるヨウイは
うシマり石田シマが陣シマの前シマに柵マサナカあり嶋シマ元シマ近シマ冒マサナカ仲マサナカ左マサナカの手マサナカ小鎗テとテり
右ヒキの手ヒキ小麾ヒキとヒキりヒキ百人ヒキづヒキり引ヒキ具ヒキし柵サクより出サクて過クワ半クワ柵クワ際クワに
残シカし静シカと進シカるシカは長政オモ馬オモより下立オモ鎗オモと提オモてオモるオモは合オモ

くろ処カン小管六之介政利少マサトシ高き所タカ上り五十挺の鉄炮を
透間スキマあく横谷ヨコヤふくくせろろま真先マツサキ進んスぶ敵手テキテオヒ負て左
近シニヤウも死生の知らぬ倒タラまナカマサしつゝ處を長政ナカマサとらとあがり
切キリづさまノキろろ左近カダの肩ノキふうけとそそを退ぬカン昔後カニは六千石の
禄賜ロクタマとら和泉イツミと称シヤウま長政筑前チクゼンの國領レウぢレウと後関アヲ介
原ハラもく撰エラミふあひ長政ナカマサのろろアリ有て軍アヲろろ人々アヲ集りて閑
話ワろろ石田サライが士大將鬼神サライをも欺アガムくとつひろろ嶋シマ左近シマが
其日の有様アリサマ今も猶目ナホメの前マヘふ在が如アルと云ろろゴトふ其物具モノの夏
せつひ出サシとく更ササふ定りあサタる人々ササ口々ササふつひろろ其軍モノの頃
石田イシダが方カタふ有ろろ士シの筑前チクゼンふ仕シへろろと三人呼寄ヨヒヨセて問トヒろろ

尤近カフ曾タテモノの立物タテモノ朱ニシの天衝溜塗テンツキタヌリ桶ツケがい胴ドウの甲ヨロヒは木綿モンシ淺黄アサギの羽
折ヲと着キろろと語カタる人々オドロ驚オドロろろと近チカ々とはめチカよせろろチカ見
覚ホえろろ夏能ナツうろろゆるよ口クチとクチき夏ナツと云ろろ其中ナカは
取トルろろ剛カウの者モノは云ろろ見たミたろろ我ワながらも去サとろろ哉
左近ヒキダが引具ヒキダろろ皆ミナをろろ物モノろろあハカリ七十計サツギの柵際サツギと
残ノコろ三十アサろろ左右サマも立てヤリて麾アサと取アサ下知アサろろ有様アリサマはアサと
案アンぢろろふ三十人計ヤリの兵アサども鎧アサの合アサと際アサはアサと引取味アサが
むろろと追オツろろと近チカく引チカよせ七十餘人ヨの者モノどもアサの
聲ゴエと揚アゲて突ツキろろ手テの下オヒクツ崩ノコとて残ノコりあウチく討ウチとろろの
手テとてなアヒろろ今思イモトひ出アヒまアヒが誠マコトふ身ミの毛アヒも立アヒて汗アヒの出アヒと

かく酒汲サケクミくらく心安ココヤスと朋友トウイウと物語モノガタリするとい大オホ小コト異イあり志シ
人々大オホく目のたやメノタヤしい失ウシひらるるぞ若モシ其時横合ヨコアヒより鉄炮テツポウ
めく打ウまきくめびメビくらが首カビの左近サキが鎗ヤリのけし貫ツラカまをん
見ミづぐくうりカチスとて必ハチしも耻ハチふあはれとをいひらる

○関ヶ原めく飯尾甚大夫安信只一騎黒田長政の陣の前ふ
馬ウマと乗寄リヨせ大音ダイオンあげて名乗ナノリくるといざ討取ウチトラんと争サキりとの
若者ワカモノども進スとくると野口左外益田與久見ニユクて只一騎先駈サキカケ
ぐる志ココロ昔ムカシといと一ヒトの谷タニ比木戸ヒキド口クろく熊谷平山クマカヤヒラヤマが終夜名ヨモスガラ
乗ノリつる体タイあり平家の士出合ウチアヒけりも志ココロの者を助タスんとあはれ
くやまウツう討ウチべくれども夫ウツの情ナゲあり後ノチと見ミよと鎗ヤリと横ヨコく

て制セイしるる飯尾度々名乗イヒラて馬ウマと引返ヒキカしるる飯尾イヒラ豊後ブンゴ
國クニ富来トミキの垣見カキミ和泉守アヰが兄利右門ケイジが子コりて五千石の禄ロクもて
秀家ヒデイ小奉公コホウコウ居イり

株瀨川シノセの軍イクサ小中村コナカムラの士成合ナリアヒ平左門利忠牛トシタツシウの舌シタ比ヒ物
めく真先マサキけりアツカと飯尾討取ヒツり其後黒田家ヒツ小仕コシへ千
石の禄鉄炮預りアツカ小長政成合ナリアヒが首取カりとき彼成合カハ
せセふらフるさるるさ勇士あり其首カビを取トるさるる三千石増ミ
与アへらアとと成合ナリアヒの中村家の士ナカムラ天正年中秀言蒲ヒデヨシガマ
生氏郷木村伊勢守秀俊ヒデトシ小奥州オクノ數十ス万石賜タガヒ一頃両家コノサウケ
とも士卒シノソの少スナふ困コマりバ秀吉下知ゲダして日本國中ニッポンの士

主人の不足ある者共或は主人の多しある者皆両家小
行て禄を得べし主人咎らば秀吉相手とんと札を書て
立ちまゝ成合ひ和泉小木川の一番鎧を合と秀吉の
感状賜りりるまゝ一氏づつふ三百石あへらまゝ故木村が
許お行て三万石佐沼の城代よりしが木村が家亡びて後復
中村が家小嶋とて仕へ株瀬川より討死しりる

○蒲生備中真令の石田が内より聞ゆる勇將あり関ヶ原の前軍
評定の時真令明日は偏ふ必死と思ひ定めらるべしとふ嶋左
近明日先陣に進んで忠義を曹とて打勝ぶと物とりハ
真令も昔より利を得る天のたはけにちるといふも軍の

正しと法令の厳しととの二ツありよく内か省あへ偏り必
死と思ひ定めらるべし勝の半あり左あり復御目見致
ゆとり座を立ちり真令元より敗軍とさるる三成必死
と究めし詞を出しり斯て関ヶ原より只一騎三成が陣は乗
行て何支おうつひるふ三成うらうなげく真令馳歸り競ひ
かゝる敵に向ひと散々又戦ひるが織田長益合て昔の蒲生
の家より横山喜内今石田が内より蒲生備中とて人小知
まゝる者ことより長益神妙ふらるる降参せしといひも終
らぬふこの何支ぞとて拜と打斬て打落を長益の従者
千賀文藏鎧を以て突通すと其柄を握て引組らるふ文藏が

弟文吉刀を取直し真令と刺て遂小打取く真令が子の大
膳の戦ひ半小首一ツ提て父小見せし功名も何せんとのを
きく又東に向ひく押くる敵よりを合とせしが父討まかり
と聞「もくをぐり我をさうりく三つ瀬川あまみ海もあまみ
とらふ歌を高くふ唱へ自害しつら大膳幼より戯と好む関ヶ
原小出陣の時母も汝が富貴を願ふあまみもあまみも
の家を生く身い昔より名を重んぶる習ひ凡物二ツの兼が
身と金ありて名を忘るまとい言べうらむとつひか父と
共死して母の戒またがらうらむ

○越前敦賀の城主大谷刑部少輔吉隆の會津征伐の従人とて兵

と出さんとせし石田三成より榎原彦右門を使ふて志ひて
佐和山の城より来らまよ密評議をせし支ありと云せらるる
此の心得どどくども是非を論じん志ひくまよ止支を得じ
て佐和山より三成悦で今度関東を討七まぶき謀をぞか
りりる大谷驚て故太閤常小徳川殿の智勇の備りるを崇
敬ありしき今徳川家を打込さん支たれひもさうらむとい
まよの三成我上杉景勝と計りて景勝旗を揚らまよ其
約を變て景勝一人を攻殺せん支本意非ど運を天命小
任まよの外道なり豊臣家の恩を厚く蒙りる身あまみ秀
頼公の御為にく一大支を思ひ立らるぞかかど豊臣家の

阜と攻落しつゝと聞て敦賀と打出て関ヶ原に到りし
秀詮の裏切と元より悟りしは僅に六百餘の陣と一手は
関ヶ原にお出り鎧冑を作りて秀詮に向ふ吉隆の目と病
て士卒の皆平塚にお知らせし勢練絹の小袖の上は村蝶と墨
と書し鎧直垂と着四方取をなす竹輿に乗らるが秀詮
裏切りと討てかゝらるゝ大谷齒とて秀詮の不義骨髄
小徹より敵の旗本と目おつけて切と入るゝと下知しつれは木
下山城守大谷大學戸田武藏守重政平塚因幡守為廣と
と最後と思ひ定め面もあつて切てかゝらるゝ秀詮の先陣立
足もなく敗北をさすとも藤堂高虎と始め東國の軍押け

進み來しは秀詮の先陣より返りて討てりしは皆死
狂ひしは鋒先秀詮の先陣又追立ちしは為廣敵あま
討り其首と吉隆を送り此首自ら討取は冥途の法と
泰らるゝ日比の約束只今討死しつゝいあんも自害して人手
おからしむれと言はるゝ外にお哥一首書添へり
名の多しは命の多しはつひのよきぬらたせと多し
一説は秀詮の士横田半次と討取其首と吉隆を送る共云り
吉隆使小向ひく武勇といひ和歌といひ感ずるは餘りあり
とや自害して追付再會せしと答へて甥の祐玄といふ僧お
返りと書とて使渡りし

契りあふぶ六のちまらまきりやておらまきどつとりのありと

かくて平塚の戦い芳きて畔小腰うけ息つぐ処小川土佐守

祐忠が兵糧井太兵衛鎧と提歩を寄る平塚立上りまきと

平塚因幡守なりとて散々な戦ひつるが終小倒まきと

文字の鎧と投出し汝が重宝にまきとて討まき戸田重政

あり程切て廻り討死しつるまき大谷が軍敗まき吉隆自

害しつる行年四十二歳とら岩佐五々首と羽織小包と其

辺の田中中埋と先手小向ひ討死しつるを藤堂の士大将

藤堂仁右門其首とつる御旗本小奉りつるふ 東照宮

五々の間ゆるりのく缺唇あると仰ありつるまき有しと

○瀧川内記辰政へ左近将監一益が末子く秀詮小仕へて松尾山

つとく秀詮の軍敗北の時のまきとて敵と支へて従者小首五

つとく秀詮のりく持とやう其所とらまき吉隆が兵と鎧を

合せ岸より下小敵と突落しつる山田喜内其首と取敵の

競ひつるまきと笹地兵庫と俱小散々小戦ひく首を取ら

後池田の家小仕へて禄三千石士大将より此軍の時廿四五つらの

年まき 辰政其始織田上野久信包小仕へて十六歳の時小田原の軍小

信包織田常真小對面まきとて従者と遠ざけ辰政只一騎

と具しとありむつとらまき江川の丸より横筋のひ小鉄炮と

打くる辰政信包の矢面は乗あさぐらう一故あらう鉄炮の
玉三ツあたる信包大小感賞して脇ざしとあさぐらう辰政
此時七郎といひ多う池田家小仕へて丹波と称し又出雲と
改む

○関ヶ原の戦ひ九月十五日辰の刻過る迄の 東照官桃配御
旗を立ちまつる処小本多三弥正重来りて今少し先へ御旗と
まゝめあひ然るべし是の敵合遠しとやと聞し名口も此の黄
ある男のいともさるる夏と仰々まへ三弥御後の方に廻り口
こゝの黄ある少もせよ遠きの遠しといひとてとやなり
三弥の佐渡守正信の弟も若く頃武者修行して度々功

名あり長篠の後の瀧川一益のりくふあつづきの軍うや
諸浪人皆をさした有し小三弥手小あひざりて一益はし
もかまると高き人の今日の夏いふふといひ此答の明日あを
とて其あけの日首ニツとて昨日の答是ありといひ甚
風流と好む物數奇のや一げある夏なく常小身に薰物を
とめり前田家もあつづきあり慶長元年伏見あり
東照官は仕へ奉りたるが以の外小直言する人なり或時幸若
八九郎と名ま高館の舞終ると後武藏坊辨慶の世小む
まゝる者今今の世ありと仰ありし小三弥承りりて
今の時辨慶の有べんれども判官小似らる主君のいおとや

せしと大坂冬の陣 台徳院殿小仕へ奉りたるは 東照
宮三弥のよきまゝ終る者なりと仰らるるが其後一万石賜り
たり 東照宮御前召出さるは思慮しるや人から
とたりあきてす終るより聞たりと仰ありたるは三弥 將軍
様の仕へ奉りよくいあの如き主君のみや者のきぢぢひり
らそいとやると聞し名又持病おらると笑をせめひ
らるとを七十二歳元和二年病死とらるる

○同一時祐筆梶左馬助終て御書と九月十五日の日付て今日
己の刻御勝利と認置たり 東照宮御感有て十五日と仰しる
尤己の刻といふは左馬助兼り敵の大軍あり己の刻を過と

らる御敗軍と存たりきとやたり

左馬助へ上田善四郎が四男あり禄四百石後千石賜りて御
使番あり

○田中兵部大輔の士田邊甚兵衛十四歳あり関ヶ原小出従者
敵と突伏田邊と馬より抱おろし首ととりせしと幼少小
て武功せし名高りたるは黒田長政田邊小逢て大に感賞し
田邊ととりくひる従者を呼出し其責を問ふと馬より抱
おろしるは刀を抽ておろし首と取りて云
長政さすの勇士とありたるは十方ある故とらる
耻しめらる首と取りたるは勲めをげたるは勇氣とい

どを河ありとて弥あめらまら

○辻小作ツチコサクの福嶋正則フクシママサノリは仕へしカニ可兒才藏カニと親シタシと深く共フカませヨ

るモとえらる物しオカグロウズキ中黒道ナカグロミチ隨ヒシカク石田賓客イシダヒシカクの如ヒシカクくりてオチユクありあき

らり関ヶ原イノハダの軍敗オチユクき一時中黒唯一騎オチユク落行兵オチユクの中フミトマ踏止り

さタカぐ小戦ツギミひウチらるを辻見ツギミていご討ウチらるカニとつゞ可兒カニあり

あカナと支カナともしりみの哉カナんけカナをツチとつゞ辻ツチとつゞ生イダとれイダ

可兒カニ不好コナちカニとて辞ジしとつゞ捨ステて馳行ハセユクとつゞ中黒馬ナカグロウマ

と深田フカダは打モロアツミ入アハて諸鎧モロアツミと合サラせても更ウゴ不動ツチコトく辻ツチ詞コトとつゞ日頃ヒコロの

よりみ助ミタケんハヤ早く取付トリツキとつゞ鎗ヤリの罅イシキとつゞ出ナカグロき中黒

かイナチタスらる命イナチタス助ナニらるナニも何ナニよりせんナニとつゞ既ステ不自害ジガイまミとつゞ見え

しツチナニらる辻ツチナニ何ツチナニとたツチナニらるツチナニとつゞ也シ神明シメありシメとつゞらるシメとつゞ

取付トリツキらるシウジウと辻シウジウ主従シウジウ引シウジウあげシウジウと陣所ジンシヨは歸カヘるカニ可兒カニ見カニて大ヨロヒ悦ヨロヒらる

とつゞ辻モノの物モノ具オモ脱アリサマてオモ裸オモなりオモ仰オモ不オモ打オモ臥オモてオモ只オモ今オモまオモとつゞ敵テキなりオモ中黒

と物モノも思オモをぬアリサマ有オモ様オモらるオモ物語モノガタリを中黒ナカグロのオモまオモらるオモとつゞ悔アチトりアチトとつゞ

心シチウ中シチウ又オモいオモらるオモとつゞ命イナチタスを助オモけオモらるオモとつゞ恩オンを思オモひオモとつゞとつゞ

後ナカグロ又ナカグロ中黒ナカグロ此ナカグロ支カクと語ワラりて笑ナカグロひナカグロとつゞ中黒ナカグロ後ナカグロ井伊ナカグロ直孝ナカグロ招ナカグロとつゞ

禄ロク二千石ナカグロありナカグロとつゞ

或ニセツ説ニセツ丹羽ニセツ山城ニセツ谷出ニセツ羽篠ニセツ野才藏ニセツ稻葉ニセツ内匠ニセツ中黒ニセツ道ニセツ隨ニセツ渡ニセツ

邊ツチコ勘ツチコ兵衛ツチコ辻ツチコ小作ツチコ兄弟ツチコの約ツチコ束ツチコとつゞ武ブ勇ユウをブ励ユウとつゞ天テ下ゲ七シ兄ケ

弟ケと云ケとつゞ

○関ヶ原の軍破き一イナヤブ時嶋津義弘シマツ ヨシヒロ真丸マニマル成て福嶋刑部少輔正フクシマギヤウラ
武の陣マハ前マヘを切抜んと一文字小おトホ マサタケ通る正武十六才イナヤブを合マハせんとす処カチタと梶田イナヤブ又右シニクルヒ門死狂イナヤブを敵軍イナヤブのせぬよとて追イナヤブつとて東國勢トウゴクゼイおけりけり義弘ヨシヒロの従子ジウシ中務大輔ナカニヤウ豊久トヨヒサ義弘の馬ウマのくく小乗寄ノリヨセてさや体テイありしがやとく大敵ダイテキふりけ合アハせ討死ウチジニと義弘ヨシヒロ今コレマデは是迄トツとして取て返カハささるる阿多長壽アタクチヤウジユ入道ラダウ成淳ヤウジユ義弘ヨシヒロの馬ウマの前マヘ小打ウマささるる大將ダイシヤウ千騎センギが一騎イツキ小成ナリいてこそ猶死ナホシをばいて謀カカリをめぐりて道ミチとこそささるる打破ウチヤブと引退ヒキシリクささるる馬ウマの首カシラと引直ヒキオホ嶋津兵庫頭シマツ最後の合戦サイゴとすカッセンと呼ヨバりてさんぐタカの戦ウチジニひと討死ウチジニ

ろろ成淳シヤウジンが義ハゲ小助モノオホの勲トマを止サり支ツカへ戦ウマひ討死ウマする者モノ多オホろろ其ヨシヒロひシマツ義弘アツ又士卒レツを集め列トシと整シツへ引退マツダヒラタく時ヨシヒロ松平忠吉マツダヒラタ井伊直政ヨシヒロあまオツさるる追りけり義弘ヨシヒロが兵タホども種シマ嶋の鉄炮コシと腰サシ小挿ヌキタとを抜出ユリしひオツと折オツをさして打オツりけり小忠吉オホヨシ直政ナホマサ共テオヒ手負モノてささるる物モノささるる一説ホシダ小本多忠勝オホシマツダ追ウマりけり馬ウマと鉄炮ウマをささるる落オツまきカガ梶金平ハセキタ馳来ウマりてあタカの馬ウマ小忠勝オホシマツと乗ノセし其間シマ嶋津シマが軍隔シマるるとカハカミ又河上カハカミ左京サヤカミが従者ジウシヤカミ柏田源藏カハカミが打ウチる鉄炮ナホマサ直政ナホマサ中マツダるともマツダり又松田某マツダとナホマサり朝鮮陣テウセンの時シカ連ツて帰カハり小兒セウニの成長セイキヤウと組クミめて有シカる鹿シカ角ツノ

の立物の由を兵部より打聞し下知し其の鉄炮を向
くは直政肩尖刀を横へて馬を乗りて逃し彼兵松田
某と名乗て打し眉尖刀の中り其玉腰骨ふるりて馬よ
り落らるるを乱鎮す後薩摩のりや直政と郷食
せし直政松田と呼出し盃をけし関ヶ原より既死
まぐる身は幸ふあぐりて今日對面するを得るんと
して後が片足をあやむる武功の人よ小禄を不足
に今日めりてあし小禄を増めりといふも彼物頭
後小直政の呼出さきて對面ふ及び時のめりて一生
ふ覚むといひたり

義弘近江の甲賀にりり老翁一人案内者ありて道ちるせ
伊賀の山路を経て上野まで行着たり爰に筒井伊賀守定
次の城なり使と以て嶋津義弘唯今打過といひ送り行
處小野武士四五百人がやど山の中を待けり義弘物の數共
を打破り二人生捕て上野に立歸り大手の柵の木をかめ付
ててそより奈良ふ出りの老翁ふ刀ふけし添ら赤銅の
筭とあり此をさし必薩摩に來き今度の勞ふ報せんと
て大坂に至り船を乗鹿見嶋に歸られり
一説に左近丞といひ姓薩摩あり是は慶長の比大坂の
商あり年々く薩摩の米とありといひる者あり関ヶ原

行^{オキ}みごと仰^{キク}らるゝを聞^{イキ}く人愈^{カン}感服^スしと云^トふ

常山紀談卷之十三終

常山紀談

十四

特32

557

館書圖京東

一 冊	三七 號	七 架	函	雜史 類	和書門
--------	---------	--------	---	---------	-----

常山紀談卷之十四目次

一 細川忠興の北比方義死の支ホソカハタビオキキタカタギシ

一 安養寺門齋三成と生捕んとせし支アンヤウジモシサイミツナリイケドヲ

附 姉川合戦の時門齋生捕とせし支アネガカセンモシサイイケドヲ

并 遠藤喜右門討死の支エンドウウチジニ

一 大津の城合戦京極家の士戦功の支オオツシロキヤウゴクケシセンコウ

附 赤尾伊豆が支アカヲアヲ

一 十時傳右門山田三左門死骸返しの支トシキヤマダシガイカヘ

一 高次大津の城と出らんとせし支タカツタオホツ

一 立花家足輕鉄炮の用意の支タチバナケアシカルヨウイ

附細川家口藥入吉田大藏猿頭の支

伏見落城の支

附鳥居忠政雜賀孫市と饗養と一支

村上三右衛門大嶋源二武者振の支

三刀谷監物田邊城小籠る支

田邊城 勅命に依て和平の支

附細川幽齋古今集傳授の支

古田助左門思慮の支

常山紀談卷之十四

備前國 湯淺新兵衛元禎輯録

○細川忠真の北の方へ明智光秀が女あり父謀反の時忠真小向

ひやきまきまらふ父なぐりかふるらぶと支よくあぶ一ともおも

たまむらひ滝川柴田あど中人々多らん必軍敗まはだ一女の

浅き智慧も口をくろくを存之男の身あらんみ鎧の袖

まごうそも諫めやべとを力あ一君り一與せさせめひあ世の

譏いうでうのぐまはせめんと涙小沈まほしく忠真光秀小同心

まうらう其後程經て秀吉伏見に有て諸大名北の方と呼

入て饗養と一支の有し小忠真の北の方かくと聞女の人あくて一聞

に入て他人タニシふちをゆるす夏やあるも各弁まんとなぐらとて懐フヤコふ
七首ヒシユを用意ヨウイぞと多り此より秀吉の悪行アクギヤウの止ヤミて多り石田西國イシダサイラク
の諸將シヨシヤウをうへて兵ヘイを起オコす時諸大名の北キ北キ方と大坂城中
小取入トリイんとくを北キの方聞モリて傳ツケふ付らまじ河喜多石見稻
苗伊賀小笠原正齋ドメイガ フガハラシヤウサイを呼ヨヒて吾此所オモを出人オモ夏思オモひもよぐに
城中ジウチウ小取トリイめらまじんチの耻辱チシヨウよく断コトワリせ中ナカ之猶聞入ナホキらまじ
は是カを限カと思オモひ定サダむべしと語カタらまじシ正齋シヤウサイ殿東國トウゴク向
をせめひし時トキかりひげゲざる夏ナツのあらんアランの正齋シヤウサイをうへて
武將ブシヤウの耻ハチかハチらハチしと仰置オカまらひテ敵奪テキダクひとトする
たぐら其時オホシメシキラ思召切オモシメシキラとめくとやうかゝる処ツボヒは城中ジウチウ小入トリイと使ツボヒと

以ていとせしうサイサン再三斷サイサンの旨オモを述ノボるまじも聞入キむ七月十七日
の未ヒシ刻コクむらムラふ大坂乃軍兵オホサカノイクンヘイ五百餘イハヒヨり玉造タマヅクリ口の屋敷ヤシキとより
まじてとく城中ジウチウ入イ中ナカさよナキカネはくイロびイロの乱入ミヤて奪取ウバヒんと呼ヨバひ
つらり女房ニヨウバウむらナキカネあナキカネて泣悲ナキカネめども北キの方キはくイロびイロ色イロも多イロく
斯カあカらんカと兼カネて押マウケりマウケひ設シヤウサイけカる夏シヤウサイぞとよ正齋シヤウサイめ錯カとよ我ワレ
生イケる世ヨふヨまヨまヨえヨざヨり人々オモテふ死シしてのオモテ後オモテも見ミらミまミんミのオモテうオモテらオモテじ
とて面オモテは覆オモテ面オモテ打オモテけオモテくオモテる袴ハカマ着キて刀カチを拔胸ヌキムネふヌキムネはヌキムネくヌキムネとてられ
しうシウ正齋シヤウサイ眉メジ尖ナギ刀ナギみナギくナギ錯カし其カまカくカをカとみカくカ腹ハラを切キんと
せし処シは正齋シヤウサイが小性コシヤウをコシヤウり来トり殿トの北キ北キ方キと同一コシヤウ所シは自害ジガイ
あぐら後のシヤウサイ誹シヤウサイはシヤウサイと云シヤウサイらまじシヤウサイ正齋シヤウサイあシヤウサイまシヤウサイりのシヤウサイつシヤウサイまシヤウサイらシヤウサイまシヤウサイ

○三成兵を起す時、大津の城に入て京極高次を對面し、跡部頼公の味方ありとぞや、高次の士は安養寺門齋と云う者、黒田伊豫小向ひ、今三成城中に入る、其誠は天のあまの怨く、りめ取て、關東小幸らんとり、黒田聞て三成を生捕とせ、西國の諸將大軍を攻め、いさむ防ぐ術のあまのき、進きて入ぞ門齋あざ笑ひ、三成の譬へ、亂の首と其餘の手足の如く、首を碎くなどあり、手足何の恐れいづと、たたく押し、せんとも固く守り、戦ふべし、軍をばして三成を生どる、あまの天下の名を揚、勲功誰らあぶ、吾年老め、と三成をうり、めん、其のあまの、今村掃部をも勸り、争論小時

移りて三成城を出、門齋のり、淺井長政は仕へ、姉川の軍小生、と龍ヶ鼻の陣あり、信長の曰く、勝を乘て小谷を打破らんと、思ふ、いさむ汝が命を助け、か、此勝敗いさむ、きと問、小安養寺兼り、長政が父下野守小谷、有て其兵三千計り、やい、い、然る、疲ま、兵を以て、攻ら、い、い、然る、い、い、信長打う、い、い、取ら、首ども出、い、い、安養寺小見、い、い、其姓名を問、い、い、中久作が取、い、い、首を見て、遠藤喜右衛門直繼と、中者あり、い、い、有様あり、い、い、と問ふ

久作あり、齋藤家の士信長小奉公、い、い、姉川まで、淺

井の士遠藤喜右門直繼云々々信長昼ヒレにかく守マモり夜々ヨヨ横山の城ヨコヤマシロを攻む信長の本陣龍ヶ鼻ホウチンノタツハナを一夜討シヨウリて勝利す
とぐひあしとらふ長政是ナカマサを用モチひざあうるがかる圖ヅとをぐりて
浅井の家危アサハと支朝夕テウセキふあを軍敗イクサヤブせん時信長と討ウチん者
の吾ワレことわひいづつ詞コトバふふがら首シビと刀の鋒カクチキリははる
ぬと大將の實檢ジツケンふそなへんと云て信長の旗本グナガハタモトに來りける
と文作討取ウチトツり文作ウチトツもて必遠藤を吾討取ウチトツべいと人ヒトじ
あうらういうある故ユぞと問トフふ其子細シサイ二ツあり吾江州ワセを遠
藤と相知ドウアヒシリよく見知ミシリり是コレ一ツ彼の聞キコゆる剛カウモノの者モノあう力チカラあり
やでまぐまぐり常ツネ小進ス、サキむ先サキづちと退ヒリく小後オシる是コレ二ツと

ついで果ツミして直繼チナツグが首カビを得ユり

竹中聞キキて首サケト一ツ提殿トウのいづくトク小まキリしあんと云てらるスづと進ス
と來キりて敵テキのちぞと入トクて殿キリを切奉キリるあんとあまの目メ
組ウチトリで討取ウチトリりと語りカダらんべ夕部ユフ大依山オホヨリあり軍破イクサヤブまゐる
が必生イキカハて歸カハらじ信長と一太刀トウ恨チウラるやさんと遠藤エニドウくついつが
果ツミして其詞コトバの如コトバくありきといふ
遠藤エニドウの浅井家アサハも名ナあり剛カウの者モノは信長江州ヨウ佐和山サワを始シ
めく長政ナカマサの對面タイメンあり公方クハウ義ギの歸京キキヤウの次ツギは依々サ、キ木兼禎キミカタと
攻打ウチウチべきまを議ギし長政も力チカラを合アはるよりの約ヤクを定め岐サダ
阜フと歸カハらうとて江州柏原カシハラに宿ミヤせしる浅井縫殿中嶋助アサハヌイデナカシマ

九郎遠藤喜右門三人馳走のつ免柏原不行が遠藤早馬より小谷の帰り信長と見ふ武勇猛めて謀りくま
しき人の浅井家とくつぐらむと支疑ひが今日決断
せしむる臣信長を刺殺しやべし其勢ひに乗て美濃
攻入りたりとつみ長政とて一度約して變ぞん支本意は非
せと聞かざれば直繼再び柏原を趣き信長をりてか信
長無支の岐阜を歸らむと直繼常は是を悔むるふか
姉川より独りんで信長を討んとす
其次小出の首を見て是の安養寺が弟より彦六甚八とや
者より死べし一所と契りし先づらつる支を口惜むとす

首をを結らむとて其後のの毛いもむかふる処は秀吉其
比の藤吉郎と云うが栗毛の馬に汗をこらしむる諸鎧を合せ
白沫をせて馳来りいざ小谷へおし寄攻破る人さといひあり
信長つやとつらつらとす軍へあぶかりとて許さむは秀吉
後悔ありんりのと急ぎ寄めくと強まども信長聞入りて
とて止まり安養寺の只首を刎らむといひはるまども吾は奉公
せよとてさやうなごめやせんまもも降参るは遂小ゆか
ささく小谷の帰りつら安養寺小たむらうまもも信長軍と返
はしりく浅井三年経て小谷の城落り其後安養寺浅
井と京極と一族ありし故高次小仕へらう若き時三郎左衛門

とぞやうる

○高次タカツグの関東クワントウ小素モトより心ココロを寄ヨセらまゝと大坂オオサカより朽木河内守クツキ
 元綱モトツネを使ツカひて秀頼公ヒコノリの外戚ウチカなれども江戸大納言殿エドダイナゴンもゆ
 うりあまの人の疑ウタガハシを散サンせん為タメに勿息熊若丸ヨウソククマワカマルを入質ヒトシチし出デされ
 ひへと高次タカツグより敵テキの色イロを立タテて止ヤムまを
 熊若丸クマワカマルを出デして北國ホクコク小軍コイクサを出デされるが岐阜キフの城落シロオチる
 ようを聞キて北國ホクコク小向コムカひる人々大垣オホカキを引返ヒキカヘさす
 高次北の庄タカツグキタノシラより直スふ海津カイツ小陣コジンより九月二日の夜半ヤハシ大津小
 陣コジンより立花宗茂タチバナムネシゲ筑紫廣門ヒロカドアマツ粟津小陣アヅコジンを夜討ヨウチにせんと謀カ
 らまゝ小黒田伊豫同心クログダイヨドウシンを止ヤメぬるがとて関寺セキシラの門モンを

閉城下トビシヤウカの兵糧ヒヤウラウを取入専トリノレモツハら防禦バウキヨの支度シタクを
 石部イシベより引返ヒキカヘして勢田小陣セタコジン取輝元トキモトの陣代チンダイ毛利元康モリモトヤスラ三井
 寺小陣デラコジン久苗米秀クナムメヒデカヌナシゲ南條中務ナヅメを始ハジメとして三万七千餘ヨシ四
 方カウより御寄ヨセらる中ナカも宗茂の軍兵ムネシゲグンヒヤウいなきう攻法セウ免メと
 死人シニシを越コエて乗入ノリんとん防兼フセキカネて京口キョウミチの旗ハタを志シりつる多タ
 賀出雲守真先ガマツサキを塙ハイと打破ウチヤブり三の丸トキツクの関トキツクを作りツクりけ
 ひろくと御入ヨリ入り山田大炊赤尾伊豆足輕頭ヤマダオホヰアカヲイヅアシカル井口左京イグチ
 大橋肥後安養寺門齋使番山田三右門横山久内田中茂兵オホハシヒゴアンヤウジモンサイツカサバ
 衛淡川口イヅラダカチを固カタめらる京口キョウミチより敵乱テキミダシ入イり二の丸ニノマルを引ヒキ取トル
 引退ヒキシラく高次使タカツグツカヒを以ナニて何ナニとて三の丸ハチを早くハヤ二の丸ニノマルへ引取ヒキトル也

仕寄シヨリを付ツケらまふバ防ボぎグうウるル一ハ早くハヤ敵オヒを追オ出イとト下知ゲチとト
まマ一ヒくク門カドを開ヒて切キく出イる山田大炊ヤマダオホヂ十文字ジュウモンジの鎧ヤリ鉢ハチと片手イシヅキカタテに
取トルて曹ソウの上ウヘとトうウ廻マ一ヒ黍ヒとト呼ヨりリうウきキく一ヒ番ヒ小鎧コヤリを合アを
敵ツキフセ二人突伏ツキフセうウり此コノを山田大炊ヤマダオホヂが茨川イハラカガチ口の鎧ヤリと世ヨと称シ一ヒく赤アカ
尾ヲの狸シヤウヒ之皮ノヒの羽折ハヨリと着キて長身ナガミの鎧ヤリあアとト數人突伏スニシツキフと山田三左ヤマダササ
門カドも散々サンザン小戦コウゼンひヒくク討死ツチシニなり二ニの丸ヒキトルを引取ヒキトル時山田と赤尾ヒキトル
かカとト六度ロクダまマどド返カ一ヒ突拂ツキハラひヒくク殿シヨウの振廻フルマヒ目メと驚オドロ一ヒくク
二ニの丸モレガタ門カド際サヘうウとト赤尾山田アカヲヤマダ已下イカのト止トりリうウる時唯タギ少齋セウサイ門カドを
とト関貫クワシとトんン赤尾アカヲちチつツともトひヒるルまマだダ長身ナガミの鎧ヤリとトりリとト
置敵オキの方カタへ足アシを投ナ出ゲ一ヒ草鞋ワラジのひヒもト結ムスび直ナホを其武者振ムシヤブとト

敵テ見ミて少ス一ヒためタらラしシ時セウサイ少齋セウサイ門カドをひヒくク中ナカへ入イ夏ナツを得エり
赤尾アカヲ棄殺ステコロとト一ヒくクうウとトりリとト少齋セウサイ敵追オヒまマりリて二ニの丸ヒキトル
小攻セメ入イんとすスる故ユとト門カドをひヒくクてテ各オノとト助タメ人タメ為ニ小城シロの危アヤフ
まマを忘ワスるルまマとトりリとトりリの伊豆コトも答コタへヘるル詞コトバか
うウりリとト黒田次郎兵衛アマコ尼子コト宮内安養寺ナガトミタハラ長門三田村安右衛門ナガトミタハラ
今村掃部イマムラカ赤尾久助アカヲ中井民部ナカ井小豆掃部アヅキ油井周防モリ京口スハウラを
防ボぎグうウるルが三サンの丸ヒキトルへ攻入テキ敵オヒと戦タケひヒくク討死ツチシニとトあアりリはハ鉾テウシ子シ五
郎兵衛ロウヘイの始関シメクワン白秀次ヒロヒデ小奉公ホウキョウとトあアりリはハ酒サケをすスたタりリ或時サト
朋輩ホウバイ小語コトりリうウるル殿下テンカのトうウとト立置タテオカまマ一ヒ白熊シロクマ色イロ白シロく丈長タケチカ
あアらラとト曹ソウの上ウヘとトみミぐグうウけケく軍イクサの先サキがガきキとトりリとトりリを

秀次聞て銚子と呼て是と肴小酒と吞とて彼白熊とあそ
らまゝに銚子誠かあつて存んたしむきにやせー詞あつて
めされていゆらん若此後軍のあらん時先かやきー詞をいふせ
んとつひるが今日栗色の志不革よ金の筋つけくる羽折と着
彼白熊の雪れどくあつて曹の上ふみぐけ十文字の鎗と横
へ尾関甚左門と共小乱ま入る敵五六人突伏て曹の鎧と傾け
一足も引宋いぞと呼り討死しつる事君の異あまじむ
賜いふる白熊もて敵味方の目と驚は討死を遂るる尾関
いりや柴田勝家小仕へが後高次北國より歸らまゝ一時尾
関と近づけ夜酒と酌て密はゆりつる吾石田小與するか

あつて歸らまゝ大津の城と守らんと思ふに汝が智勇と頼
むと語らまゝ尾関涙と流し人々いくらも中か何と思ふ
まゝと斯仰いぞを此上の二ツあつて答へるまゝ高次汝討死す
まゝとが為よ命と捨んと押もふ者多々れど謀と同どくする
者稀ふこそあま汝偏か討死とのまかひるる吾志か非むと
いふまゝに尾関く身はあつて御詞と承りて骨と刻
まれのいづの堪がたに度ありとも此恩は報し奉らんと云が
此時銚子と俱小戦死より後高次城と出らまゝ時赤尾と
山田と高次の輿の左右小供らつてを見て寄手の軍兵ゆびを
はりの大膽者よと云あつり

一説は伊豆淡川口の敵と追拂りんとて出する時跡と弟
の久助内田太郎左三門多賀孫左三門ホ守りろくを寄手き
びく攻る久助手負て吾いホれよ引退んとり内田聞も敢
む昔熊谷が子の直家にうけ手あつて討死を痛手あつた
自害せよとつり支弓箭取身の詞なり爰と逃んとり口と
しき支よ大剛の伊豆が弟小汝が如き人の有るるを怪るを
と罵りろく内田の銀の馬櫛と曹の立物ありろく銀の馬櫛
よとあめろくはどの物師の敵今村掃部が持口を破るを乱
入りろく伊豆あり返り見て三の丸いりてとて引返り人々
敵既攻入て入るる方あり京洲の丸より入るるを共伊豆

少もひろくを初出する所より入あんとてゆりろく
とて鎗を提て敵に向ふ伊豆従ふ者四十五人下部ハ皆逃
散て伊豆が若黨一人平野藤兵衛と云足輕一人残留まり
伊豆むろ立ち敵を物ともぞげれ手十文字小追立さんぐ
小戦いろく敵尚烈しく進み来りろく尾関甚右三門鉞
子五郎兵衛二人土橋の上より返り合を大音あげて存る
子細ありろく討死するよ寄て首をととて面もあつた
切死をせしりろく其ひろく赤尾をせつと行過る城
際小至る門の外に柵小篁戸あり赤尾篁戸をせつとろく
平野静小篁戸をせつと門を開けろくろく少齋法

師武者もく門を固めく有りが矢倉に上り味方と知り
ふと敵付入るに人々軽く城の重く爰を死せむ
と所あるをゆるゆり討死せしよ是より見物せんとす赤尾
石ふよりかゝる息とつゞ九尺計なる鎗を下置て脚半の
紐と結び直に敵簀戸を破りて押寄る処を八十餘人の兵
ども爰を限りと面もくつ突くる赤尾もつらふ緒を定め
終つてつと立上り赤尾伊豆と知らせと名乗て乱れ
入る敵を念なく突退け追出せ少齋矢倉より鉄炮を厳く
打出るを多し立花の勢も餘らふ手いふ防がきて引退く
かて少齋跪て鎗の穂先を門のくゞり戸小當て一入づ静か

入て多し斯らるる無礼ふくも門を守り法くとりふる入
終つて伊豆と平野と二人門対小殿して残りたるが平野を
赤尾小先入より赤尾の平野小汝先入よとて終る赤尾
押くきて入るといふ

赤尾伊豆の美作が子なり信長小滅さむと
信長江州小谷の城を攻む浅井長政勢尽て既小自害せんと
する時不破河内を以て縁者のよる降参あはる疎意あはじ
と言せしむ小長政降参さむ志又非るを近習の士ども
をも別の子細もいハド城を出て運を開きとつらふが
父下野守も共小疎意あはる降参せんとて城を出るを信

長^ミ見^{ナガ}て長^{ナガ}政^{マサ}何^ニの面^{メン}目^{ボク}有^{アリ}て今^{イマ}更^{サラ}の降^{カウ}参^{サン}ぞと高^{カウ}聲^{シヤウ}小^コ呼^コり
せら^セら^ラま^マー^ーら^ラば長^{ナガ}政^{マサ}忽^{キリ}て赤^{アカ}尾^ヲ美^ミ作^{サカ}が宅^{タク}小^コ入^ケて自^ジ殺^{サツ}ぞり浅^{アサ}井^{ハシ}
石^イ見^{ハミ}赤^{アカ}尾^ヲ美^ミ作^{サカ}の切^キ死^リぞとてか^カけ入^ケるを多^タ兵^{ヘイ}押^{オシ}隔^ゲて生^イ
取^{ドリ}て信^シ長^{ナガ}の前^{マヘ}小^コ出^{イダ}は信^シ長^{ナガ}汝^{ナニ}ホ長^{ナガ}政^{マサ}をそめ朝^{アサ}倉^{クラ}小^コくみ
して吾^{ワレ}を敵^{テキ}とあ^アま^マあ^アま^マる果^{ハテ}と見^ミよと罵^{ノシ}らるる浅^{アサ}井^{ハシ}居^イ
直^{ナホ}り更^{コト}新^{アタラ}しきことを承^{ウケ}けりぬる義^{ヨシ}景^{カゲ}を別^{バツ}事^ジあ^アく立^{タテ}置^{オカ}ん
との誓^セ言^イ文^{モン}其^チ血^チもい^イや^ヤぶ^ブら^ラら^ラら^ラら^ラら^ラ越^エ前^{ゼン}軍^{イク}と出^コし是^コ小^レ
とく長^{ナガ}政^{マサ}義^ギの當^{アタ}ら^ラぬ久^{キウ}く義^{ヨシ}景^{カゲ}小^コ與^ヨり今日^{ケフ}城^{シロ}を
出^イる疎^ソ意^イめ^イじと偽^{イツ}ら^ラふ詞^{コト}を押^{オシ}らるる只^タ自^ジ害^{ガイ}と一^{ヒト}ま^マら^ラふ決^{ケツ}
ら^ラら^ラら^ラ若^{モシ}天^{テン}運^{ウン}に^イよ^イく家^イを^{タテ}立^{タテ}るあ^アら^ラば信^シ長^{ナガ}を斯^{カク}ので^ク

か^カら^ラめ^メん^ンと思^{オモ}ふく成^{ナリ}ら^ラ義^ギと知^シら^ラ耻^{ハチ}と知^シら^ラ信^シ長^{ナガ}
そ^シ人^ニ面^{メン}獸^{ジュウ}心^{シン}あ^アま^マと^ト信^シ長^{ナガ}弥^イ怒^{コト}て汝^ニ詞^{コト}も似^ニぢ^イ生^イ捕^ケま^シ
を^オら^ラい^イふと罵^{ノシ}ら^ラく小^コ年^{トシ}老^{オホ}め^メばカ^カ小^コ及^キば昔^{ムカシ}より吉^シ
生^イ捕^ケとあ^アま^マ更^{ハチ}耻^{ハチ}ふあ^アら^ラば武^ブ勇^{ユウ}を以^テて敵^{テキ}を討^{ウチ}得^エむいつ^ツ
た^タら^ラりて人^{ヒト}の國^{クニ}を亡^ホら^ラそ^ソ耻^{ハチ}あ^アま^マ見^ミら^ラま^マ必^ダ下^ゲ人^{ニン}小^コ首^{クビ}を
切^キら^ラばと罵^{ノシ}ら^ラ返^{カエ}る信^シ長^{ナガ}杖^{ツエ}を以^テて打^ウま^マし石^イ見^{ハミ}打^ウ笑^{ウラ}ひ
う^ウら^ラめ^メる者^{モノ}小^コか^カるるをう^ウら^ラめ^メるあ^アら^ラま^マよ^ヨ大^{ダイ}将^{シャウ}の礼^{レイ}儀^ギを
い^イら^ラめ^メるも^モう^ウや^ヤ犬^{イヌ}坊^{バウ}と罵^{ノシ}ら^ラるるが石^イ見^{ハミ}も美^ミ作^{サカ}も終^ツふら^ラ
さ^サま^マら^ラり

伊^イ豆^{トウ}幼^コう^ウり^リが僧^{ソウ}と成^{ナリ}て多^タ賀^ガ小^コ匿^{カク}を居^イら^ラふ十二^{ジュウニ}歳^{サイ}の時^{トキ}多^タ賀^ガ明^{メイ}

神の鳥居トリノのかうりまう遊アソブびる処トコロの家の士ウチノも十二人打ウチ連ツレて通トホり行ユキある士イカク怒コソウて小僧コソウめ無礼ブレイことと拳コシまう頭カシラと
うの伊豆飛トビくう其士カネの刀タチを抽スイて只一打ヒトウチ又切キリまう一つと走りぬ
けく赤尾アカヲふるく居イりーが後京極キヤウキョクに仕シへる

○立花宗茂使タチバナムネシゲツカヒと城中シヤウチウふとく味方ミカタ討死ウチジニの中ナカふ十時トキ傳ツタ右ミ

門カドと中ナカ者モノありとりて不便フビン又存タマヒる骸カハネを返カヘしめりてと
て物具モノグの色イロと書カキて言イヒ送オウらまうかかて返カヘしめりて又城中シヤウチウよりも
山田三右門ヤマダサウモンが首シビを返カヘしめりてと望ノゾみられし曹カゴを添ツクて送オウら
まう此コノと大津オホツの死骸シガイカハ返カヘしめりて勇士ユウシ死後シゴの初ハジメと
高次タカツグ大津オホツの城シロを守マモり固カタく高野カウヤの木食上モクジキ人ヒトを以モツて

和平ワヘイと執行トリオチふ高次タカツグは同心ドウシンなりしふさしりの長臣チヤウシニコロダ黒田
伊豫イヨ寄手ヨシテふ心ココロを通ツウすればかあく和平ワヘイと城シロを出京キヤウト都大ダイ
佛ブツの養源院ヤウゲンインに立寄タチヨリをまう高野カウヤふ赴オモムく関ヶ原関ヶ原記記に三井寺三井寺と
三成ホロビ亡ホロビて後ホロビ 東照宮タカツグ高次メシを召メシらるる今度イマタ諸將シナタイ皆ミナ大功ダイコウあり
一人々ヒトヒトあつる吾城シロ一ツ守マモりしげざり身の立タチまうらん其口クチ惜シ
とて出デらるる使ツカヒを以モツて御物語モノガタリありしに其夏ナホあり尚ナホ出デらるる
我が我ワレ行ユキん年トシ老オイる身ミを勞ラウをくまんとし若役ワカヤクと仰ウケ出デ
さるる高次タカツグ辭ジしめて出デらるる 東照宮タカツグ此度ココ城シロ
を攻セる敵兵テキヘイ大垣オホカキ不到イタる程ホドあつる関ヶ原関ヶ原の軍イクサ危アヤうるべし九ク
州タイの大軍ダイグンを數日スジツ隔ヘらるるゆゑ軍イクサの援タスキとなりし其大津オホツ城シロ

中の軍兵残りなく関ヶ原ふ来りより遙かきり敵
より乞ふる和平なきは耻はあらばと仰らる大津みくのまゝ
まば近江よて四十万石賜ふべしとありし高次聞て賞せ
させぬが関ヶ原よて大功の人ら百万石を賜ふべしと思も
よろばと固辞せしきり

一説関ヶ原の軍敗まゝ 東照宮大津の城ふ入せぬ山
岡道阿弥供奉しころが京極宰相よく持らぬ今少の
まみく本意を遂むとやまは御答なく奥平が長篠よ
て武田を防ぎし戸障子小鉄炮の玉れあと鹿子をゆひ
ころが如く土も落ち板もぬけころをとりたるまを

立て持て入るるを仰らる又高次の使者多賀孫左門
大坂お参りころふ御前よ名て京口の旗を早くまがりし故
敵攻入ると聞名より仰有し口惜く存いし云て泪を
流しころを井伊本多に向ひ下部のヤは木履り雪の
つきたる如くある御出馬よやまあんだの如き城は高次の
まばろを数日敵よぐまへしといひくは戯あがり理ありとぞ

○立花宗茂大津の城攻め足輕は縄をけし其縄目お
玉菜の早合をよさませして箭をつがより早く鉄炮を搏せ
らまたり